

ISSN 0917-5695

寄せ蛾記

埼玉昆虫談話会



故 市川和夫氏 追悼号

No.73 1994.9.15

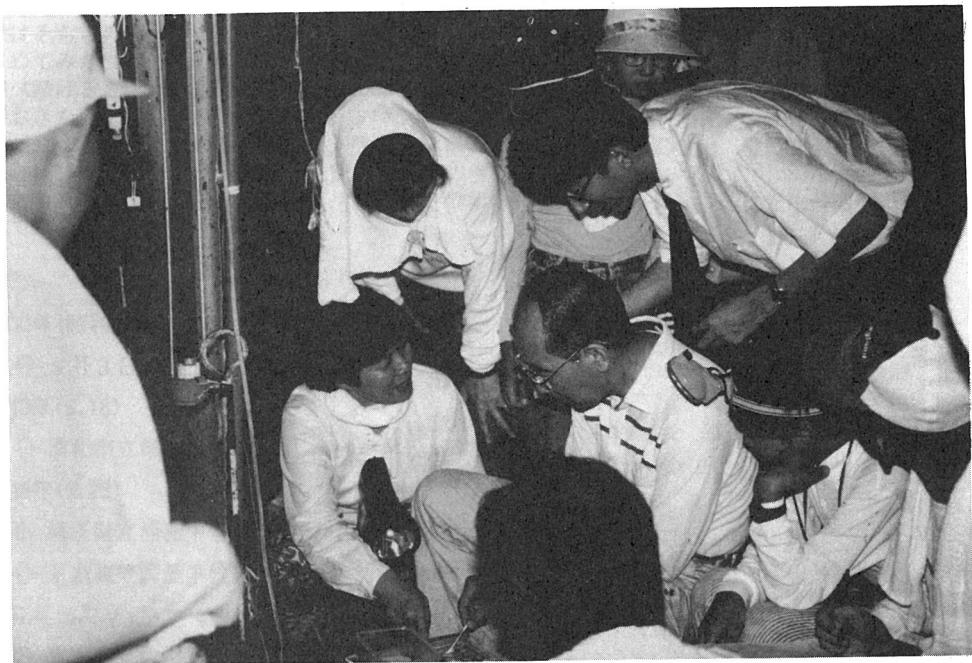
表紙 ホタルガ 小堀 文彦

あの日、ホタルガが乱舞していた天覧山での調査会から帰宅して、市川先生の訃報を聞いた。通夜では遺影の回りを一頭のホタルガが悲しげに舞っていた。

「奥さんとお子様達はお元気ですか？あなたの事はどうでもいいんですけどね。」優しい先生は、にこやかに笑いながらいつも同じことを仰っていた。

ホタルガを見る度に先生のことを思い出す。

題字：市川和夫先生（寄せ蛾記No. 1より）



市川先生のまわりには、いつも『虫との付き合いを楽しむ』気配が満ち溢れていた。

1993年8月9日、北本市高尾での夜間採集にて

市川和夫先生と埼玉昆虫談話会の歩み

(文責 碓井 徹)

市川先生のなさってこられたお仕事をまとめようと、埼玉昆虫談話会の資料などをひっくり返しているうちに、当会の歩みそのものが、実は先生の『虫の世界』での足跡そのものなのだとということに気がついた。そこで、本来ならば“市川和夫先生 略歴”といった内容のものにすべき本稿を、先生の虫の世界でのご活躍の様子に当会の歩みを重ね合わせた内容のものに仕立てた。。

先生は高校で長年教鞭をとられ、高校理科教育の方面でも多くの業績を残していらっしゃるのだが、本誌ではそちらの方面のことは割愛し、私達がもっとも親しく接していた『虫屋』の市川先生の足跡をここにまとめてみたつもりである。これ以外にも、おそらくあちらこちらでご活躍であったとは思うのだが、完全に調べ上げることは困難であった。いくつかのお仕事が抜け落ちているかもしれないことを、最初にお断りしておきたい。

なお、本稿をまとめるにあたり、先生の奥様の市川淑子様、細田浩氏、町田文彦氏、当会会員の齊藤貴氏からは特に御協力を頂いたことを記し、感謝の意を表したい。

文中、各年の後ろの《 》内は、当会のその年の刊行物を表わし、◇印は先生の略歴やエピソードを表わしている。

1930年(昭和5年)

◇ 9月3日 誕生

1943年(S.18)

◇ 浦和市立第一小学校(現 高砂小学校)卒業

1948年(S.23)

◇ 埼玉県立浦和中学校(現 浦和高等学校)卒業

◇ 東京高等師範学校入学

1952年(S.27)

◇ 東京教育大学東京高等師範学校 理科3部卒業

◇ 浦和市立高等学校 教諭

1962年(S.37)

“埼玉県植物誌”刊行

1963年(S.38)

◇ 6月，“埼玉蛾類談話会”の母体となる集まり(第1回談話回)が市川先生宅でひらかれる。

1964年(S.39)

日本蛾類学会第44回蛾類談話会が浦和で開催される(1964.3.29)。

1965年(S.40)《寄せ蛾記 No. 1～3》

“寄せ蛾記”創刊

いよいよ“寄せ蛾記”が創刊され、正式に“埼玉蛾類談話会”という名称が用いられる。会誌名は、矢野重明氏の命名とのこと(次ページ参照)。当時の会員数11名。会費は300円だったらしい(隔月毎に開かれる例会で50円ずつ徴収と書かれている)。

1966年(S.41)《寄せ蛾記 No. 4～8》

雑誌“昆虫と自然”創刊

No. 1, pp. 1 - 4

1, VI, 1965

寄せ蛾記

埼玉蛾類談話会 発行(連絡会報)

YOSEGAKI ; THE SAITAMA HETEROCHERISTS' GROUP

会の成りたちについて

市川和夫

この会は、埼玉県南部に居住している日本蛾類学会の会員が、談話会に出席した帰路に詰し合って成立したものである。

そうして、学会の談話会が開かれない月に、主として県内の同好者が小グループの会合をもち初め、1963年の6月から本年4月までの間に10回の集まりを行ってきてている。この間には、不行きとどきな点が多く、恐縮しているが、学会の第44回蛾類談話会(1964年3月29日)を、初めて浦和で実施するなどのこともあったし、また、杉繁郎・中村正直の両氏に来て頂いて、主としてヤガ科とシチホコガ科の同定や、その他の教示を頼つたりししてきた。

ふだん会合の際には、採集標本の供覧・採集経験の発表や意見等の交換・参考図書や文献の相互利用などを行い、会名も会則も、そして入会規定もないままに、ただ蛾の好きな人達が毎回10名近く集まり、およそこのままで益々参加者が増加し、会の内容を充実してくるものと予想されるが、それと同時に、しりきれどんばとならないよう自重しなければいけないと詰合って

いる。

さて、最近になって、連絡会報を発行しようという話や、会の運営を円滑に行うための通信事務、会員登録の關係から、必要最小限の次の事項が、第9回と10回目の会合の際に決定している。

1. 会名 埼玉蛾類談話会
2. 談話会 原則として隔月に1回(日本蛾類学会の例会がない月)。
3. 会場は、浦和市大谷場1,270 市川方 TEL. (22) 1839
4. 連絡・事務等担当者 田村公憲
5. 会報担当者 市川和夫

私としては、この小さなグループが将来は日本蛾類学会の埼玉県支部という形に発展できればよいと期待し、会員ともども励んでいきたいと考えております。それにつけても、学会や他の研究会・同好会などの諸先輩の助言や懇親会指掌を賜りたく、会の紹介と併せてお願いします。

1967年(S.42)《寄せ蛾記 No. 9~11》

1968年(S.43)《寄せ蛾記 No.12》

埼玉蛾類談話会、活動停止期にはいる

市川先生の体調不全により、11月発行の12号を最後に、ここから約7年間、“寄せ蛾記”が発行されない状態が続く。

1969年(S.44)

1970年(S.45)

◇ 埼玉県立浦和通信制高等学校 教諭

談話会開かれる。

浦和通信制高校にて(?)、12月19日。会員数30名。

1971年(S.46)

“埼玉県動物誌”刊行計画はじまる

雑誌“月刊むし”創刊

1972年(S.47)

1973年(S.48)

1974年(S.49)

1975年(S.50)《寄せ蛾記 No.13~15》

埼玉蛾類談話会 活動再開

3月10日、8ページの13号が“活動再開”を告げる手紙(次ページ)とともに会員に郵送され、蛾類談話会の活動が再開される。

1976年(S.51)《寄せ蛾記 No.16~19》

◇ 埼玉県立浦和高等学校 教諭

会費値上げ(“寄せ蛾記”4号分 500円)

1977年(S.52)《寄せ蛾記 No.20》

会員数50名

1978年(S.53)《寄せ蛾記 No.21~24》

8月20日、埼玉昆虫談話会に改称

大野正男先生からのアドバイスもあり、しばらく前から市川先生は“埼玉蛾類談話会”的名称を変更しようと考えておられた。私は、“埼玉むしの会”というアイデアも聞いていたが、やはり、スタート時点での“談話会”という形態に、先生はきっとこだわりを持っておられたのだと思う。

“寄せ蛾記”手書きから和文タイプへ

市川先生お得意のガリ切りによって版下を作っていた“寄せ蛾記”は、23号から和文タイプライターによる版下作りになった。使用された和文タイプは、先生がこの年の夏に購入した日本タイプライター社製の“Neo Writer”で、活字は“寄せ蛾記”用に9ポイントの細丸ゴチック体。このタイプライターは、この時期に教育現場を中心にずいぶん流行ったが、のちに“グリコ・森永事件”で犯人が脅迫状に用いたのがこれと同機種のタイプライターであったことが判明し、このタイプライターの持ち主は、警察からそれなりの事情聴取的(?)な電話を全員(!)が受けている。私も、使用していた別会社の和文タイプに、日本タイプライター社の特殊な活字をいくつか入れて使っていたので、やはりそれなりの電話を警察から頂戴し、市川先生と、お互いの警察からの電話の内容を話題に盛り上がったことがあった。

会費値上げ(年間600円)

“埼玉県動物誌”刊行

埼玉県内の昆虫相を語る上でバイブル的な存在である“埼玉県動物誌”は、1971年から6ヶ年計画で綿密な調査が重ねられ、この年の3月に刊行されている。市川先生は、同誌の編集委員会のなかで『調査部主査』をなさっておられ、刊行に向けてのデータ蓄積に取り組ま

れる並々ならぬ熱意と、1975年に再開された埼玉昆虫談話会の活動，“寄せ蛾記”の内容の充実ぶりとは明らかにシンクロしていた。そして，“埼玉県動物誌”が刊行されたときの先生は、本当に嬉しそうであった。

「寄せ蛾記」続刊等について

1969年以後の長い間、休会同様のありさまで、何かと皆様にご迷惑をおかけしてしまった申訳けありませんでした。

昨秋、原聖樹・並木杉雄・雨宮第一・大島進一等11名の皆さん方が浦和通信制高校(市川の勤務校)に集まり、会の今後のありかたについて改廃することも含めて協議しましたが、以前と同様に活動していくことに決定いたしました。

本日発送しました、「寄せ蛾記」No.13をもって再出発としましたので、10倍のご指導を頂きたくお頼い申し上げます。

次回は原稿がまとまり次第発行しますので、採集報告、短報など、皆様のご寄稿をお待ちしております。

1975年3月10日

埼玉蛾類談話会

“寄せ蛾記”続刊について、先生が書かれて“寄せ蛾記”13号に同封された手紙

1979年(S.54)《寄せ蛾記 No.25~26》

1980年(S.55)《寄せ蛾記 No.27~30・Supplement 1 [総目次 No.1~25、会員名簿]》

“寄せ蛾記”総目次

市川先生が職場でパチンパチンと打つ和文タイプは、見ていて実に面白そうだった。私の職場にも大型の業務用和文タイプが1台あって、何となく操作してみるとどうにかなりそうだったので、先生に、これで“寄せ蛾記”的総目次を作つてみたい旨申し出ると大賛成していただいた。苦労しながらもこれ1冊を作つたおかげで、私は、職場で『和文タイプの達人』とまで認められるほどのタイピングの腕になっていた。付録につけた会員名簿によれば、会員数61名。

1981年(S.56)《寄せ蛾記 No.31~34・会員自己紹介録 その1》

◇ 埼玉県立教員養成所 講師

久しぶりの談話会開催

おそらく1970年12月以来の談話会が、3月29日、県立浦和高校の会議室でおこなわれる。4月1日から教員養成所に転勤が決まっておられたので、この談話会は、とても気忙しそうなご様子だった。

“寄せ蛾記”編集担当が碓井へ

私が和文タイプライターを購入(Maruzen Full Auto 80)し、32号より編集を担当、グレーの色上質氏による表紙付きの“寄せ蛾記”がスタートする。本文は5号明朝体。中綴じ用ホッチキス(ロングリーチ・ステープラー)を会の備品として購入し、表紙と両面印刷した本文の孔版上質氏を中綴じで止めて二つ折り・・・という、のんびりしたハンドメイド“寄せ蛾記”作成の現場。発送は先生が引き続いてなさっており、出来上がる度に、私の勤務先へ車で取りに来てくださった。

夏の宿泊談話会スタート 第1回は奥秩父にて

春の談話会で話が出てから急遽“夏の宿泊談話会”的実施が検討された。現在では当会のメイン・イベントとして定着している“夏の宿泊談話会”は、この年の8月28日から29日にかけて、坂田正哉・佐々木和男両氏のお世話で、秩父郡大滝村川又の東京大学秩父演習林宿舎を会場に始まった。この年は12名が参加。

会費値上げ(31号まで年間800円。32号以降は、『4号分で1000円』となる)

1982年(S.57)《寄せ蛾記 No.35~38・会員自己紹介録 そのII》

春の談話会 開かれる

前年と同じく、浦和高校で3月28日に。参加者21名。

金曜セミナー 始まる

春の談話会で提案された“毎月一回の会合”が、“金曜セミナー”というかたちで4月から大宮の喫茶店で始まる。

夏の宿泊談話会 奥秩父にて

前年同様、大滝村川又の東京大学秩父演習林宿舎を会場に。17名参加。

1983年(S.58)《寄せ蛾記 No.39~40》

春の談話会

金曜セミナーの会場でもある、大宮市の喫茶『菱屋』にて、4月3日に。参加者15名。

会のマーク決定

春の談話会の席上で、応募5点の中から、ベニシジミをデザインした現在のマークに決定。製作者は、当時はまだ高校生だった堤啓輔氏。



狭山丘陵(所沢市三ヶ島)調査

早稲田大学が新キャンパスを建設する予定地になっている当地において、神久保光津夫氏を調査責任者に、会としてはじめて特定地域の集中的な調査を手掛ける。この年一年をかけておこなわれた同地での調査の様子と、そこで見られた昆虫たちの姿は、ほとんどの調査に参加された牧林功氏によって“雑木林の小さな仲間たち 一狭山丘陵昆虫記一／埼玉新聞社刊”という本になった。この本の中には、現地にテントを持ち込み、入手したての発電機を回しての夜間採集や翌日曜日の昼間の蛾の調査に余念のない市川先生の様子もあちこちに描写されている。

夏の宿泊談話会

埼玉県秩父郡大滝村三峰山 民宿『みつみね』にて、8月27~28日。井上寛先生をはじめ19名の参加があり、民宿のアルミサッシは窓そのものをドライバーではずし、部屋の中に白布を横断させて誘蛾燈をぶら下げ、その下で鱗粉入りの酒を楽しむ・・・・というご乱行ぶり。

1984年(S.59)《寄せ蛾記 No.41~43・Supplement 2 [所沢市三ヶ島の昆虫類調査報告]》

◇ 埼玉県立養護教諭養成所 副所長

◇ 荒川総合調査

市川先生は、この4月よりはじまった県の荒川総合調査に、鱗翅類の調査員として従事（1987年度まで）。

春の談話会（総会）

4月1日、熊谷市文化センターにて。25名参加。この回から、スライド上映や一人一話の他に、事業報告・会務連絡などしっかりと時間をとって行なうようになり、春の談話会は「総会」としての性格が強くなった。特定地域の集中調査や本の刊行など、多くの会員の同意を得ながら会としての活動をしていく状況となってきたことで、これは当然の成り行きと言えよう。

夏の宿泊談話会

6月30日～7月1日、昨年同様、三峰山 民宿『みつみね』。19名参加。

Supplement 2 [所沢市三ヶ島の昆虫類調査報告] 発行

この増補号は、市川先生がタイプを打ってゲラを作った。対外的にも注目される印刷物になるだろう、という判断から、「寄せ蛾記」では初めてオフセット印刷を外注した。この増補号の“III.あとがき”で、市川先生は会の代表者として、当地に新キャンパス建設を予定している大学がおこなった当地的環境調査等に対する不誠実な対応をかなり強い語調で批判し、当地的環境保全を訴えている。増補号の表紙には、そのことを意図したサブタイトルも書かれており、この“寄せ蛾記”増補第2号は、『市川和夫氏 怒りの1冊』とでも言うべきものであった。

【埼玉蝶の世界】刊行！

およそ1年半の準備期間を経て、7月10日、当会としては初めての単行本『埼玉蝶の世界』が埼玉新聞社から出版される。出版記念会は7月22日、浦和の割烹『市川』にて、21名の参加。

◇ 夜間採集で警官8名を誘引

市川先生が9月1日に大井町で夜間採集をおこなったところ、警官8人が駆けつけたという話題を金曜セミナーで披露。韓国の全斗煥大統領来日に関連しての超厳重警備にひっかかってのことだったようだ。

1985年(S.60)《寄せ蛾記 No.44~45》

有志による新年会

金曜セミナーの二次会などで話題がでていた“新年会”が、1月26～27日の週末を利用して、越生町にある『厚生年金休暇センター』で開かれた。金曜セミナーの常連メンバーで急遽まとまつた話だったので、会誌できちんと全会員に連絡も出来ず、“有志による”という形になった。参加者15名。

“昆虫観察テクニック”出版

3月20日、日本交通公社より出版。同社出版部の“アウトドア・シリーズ”的No.103として。約6カ月の準備期間しかなかった割には、まとまりのある内容になっていると評判。

◇ 市川先生、テレビ埼玉に出演

3月18日，“県民放送大学講座”最終回に『奥武蔵のチョウ—昆虫とその生態—』というタイトルで出演。

総会・春の談話会

浦和高校にて、3月31日。13名参加。

会員数128名。

総会で会員数の急激な増加が報告される。『埼玉蝶の世界』の出版などが影響してか、ここ1～2年間の会員増はめざましいものがあり、1980年の66名から、5年間ではほぼ倍増している。

北本市石戸宿 調査

1983年の所沢市三ヶ島調査に続いて、この年は、県が“自然学習公苑”を作ることを表明している北本市石戸宿で、会をあげての昆虫相調査に取り組むことになり、竹内崇夫・山崎

正則両氏を責任者に、夜間採集も含む毎月1回の調査が組まれた。

夏の宿泊談話会

8月10~11日、長野県南佐久郡川上村梓山；白木屋旅館。31名参加。この旅館は、市川先生の馴染み(?)の宿であるらしい。出掛ける前から、『とても良いところだから』と話しておられた。天候があまりよくなかったのが残念だったが、旅館の近くの学校の校庭でおこなった夜間採集でナマリキシタバが1頭飛来し、市川先生は、十文字峠~三国峠の稜線を指さして、『ナマリは石灰岩地帯の蛾。ほら、あの稜線からこの灯りに引き寄せられてきたのですよ。私は、それを狙ってちゃんとあの稜線に向けてセットしておいたのですから・・・』と、とても自慢気に話しておられた。

“昆虫飼育テクニック”出版

9月10日、日本交通公社より出版。同社出版部の“アウトドア・シリーズ”のNo.116として。前作の“観察・・・”より短い約3ヶ月の準備期間でつくりあげる。なお、同シリーズのNo.113は、牧林功氏による“チョウとつきあう本”で、同年7月10日に出版されている。

“寄せ蛾記”第二世代へ

前年ころから、いわゆる“ワープロ”が普及の兆しを見せはじめ、新し物好きの市川先生は、これにかなり興味をもっていたようだった。金曜セミナーでも、パソコンなどに詳しい会員に、随分アレコレとワープロの事を聞き回っていたし、『埼玉蝶の世界』の収入で一時的に裕福な会計状態だったこともあって、会誌編集にワープロを導入することは時間の問題、との認識が先生にはあったようだ。『あのギザギザ文字が好きになれないですね。もう少し綺麗な字が打てるならねえ・・・』と、よく口にしておられた。編集を担当していた私は、この時期に先生から『そろそろワープロを考えませんか、少し高くても綺麗な字が打てる機種があるでしょうから』と頻繁に言われたが、キーボードの奇怪な文字配列が怖かった私は、なかなか承諾できなかった。それでも、“寄せ蛾記”は50号記念号以降の新誌面作りをめざしてこの45号からいろいろな試みをすることになっており、愛用していた和文タイプライターの調子が悪くなって会誌作りに支障が出ていたこともあって、この年に発売された、12ポイント文字を32ドットで美しく打ちだすSHARP製のWD-605という定価33万円のワープロ専用機を会の備品として購入した。この時期に、昆虫同好会として会誌の編集用にワープロを所有していたというのは、かなり先進的な体勢だったのではないだろうか。このあたりにも、市川先生の柔軟な発想をみることができるような気がする。

こうして、“寄せ蛾記”45号は、やや硬質の表紙・(一部)ワープロによる版下・オフセット印刷という、新しいスタイルの会誌として送り出された。

1986年(S.61)《寄せ蛾記 No.46~48》

有志による宿泊新年会、今年も

2月1~2日、吉見町八丁湖；フレンドシップ・ハイツにて、13名参加。

総会

3月30日、熊谷市立文化センターにて、21名出席。

◇ ヤマダカレハを1.2トン

新座市平林寺に異常発生したヤマダカレハ、県の文化財保護課の事業にかかわった市川先生は、人海戦術で幼虫を1.2トン、成虫は誘蛾灯で26000個体集めた、という話を総会で披露。

会費値上げ(4号分1000円を2000円に)

北本市石戸宿調査、2年目。そして特集号発行

昨年一年間の調査で大きな成果の上がった北本市石戸宿地域での昆虫相調査は、参加者の要望でこの年も補完調査が組まれることになった。そして、これら一連の調査のなかで、オオイチモンジシマゲンゴロウが採集され、新聞各紙で大きく取り上げられて、当会の調査が一躍注目を浴びたことは記憶に新しい。市川先生は、この自然環境豊かな地に、県の“自然学習公苑”構想の他に、自治体による“遊園地的”公園の構想もあることを知っており、当地の豊かな生物相を強くとアピールすることで“自然学習公苑”構想をバックアップしたいと考えておられた。この頃の金曜セミナーでは、先生は盛んに『北本市石戸宿の昆虫相のまとめは、ぜひ良いものを作りましょう。そのことで、より良い“自然学習公苑”ができるでしょう。』といった内容の発言をよくしておられたが、そこへこのオオイチモンジシマゲンゴロウ発見のビッグニュースがあり、すぐにこれをマスコミに流すことを決めたようだった。市川先生は、この年の5月の金曜セミナーで、『北本市石戸宿のことで、ゲンゴロウで

ジャブを繰りだします。とどめは、『寄せ蛾記』のまとめの特集号です。』と発言している。そして、このニュースを、マスコミがことさら“珍”だの“稀”だのといった活字を踊らせてセンセーショナルな陳腐な記事にデッチあげることを避けるため、先生は、この大発見を冷静にそして正確にまとめた文章に築比地秀夫氏撮影による美しい標本写真添えた報道資料を、各新聞社に1社ずつ渡すこととしたのだった。それにより、この年の6月4日（ムシの日！）から翌日にかけて、多くの新聞社が、地方版ではあるが、オオイチモンジシマゲンゴロウ発見の正確な記述の記事を掲載する結果となった。

そして、この年の調査結果もたっぷり盛り込んで10月に発行された寄せ蛾記48号は“北本市石戸宿の昆虫類（特集号）”。先生は、とにかくできるだけ早くこの特集号を発行することを目指しておられ、私がまだ慣れないワープロに悪戦苦闘していることを察知してか、夏前に、『北本の特集号は、私がタイプライターで版下を作りましょう。ひと夏、十分に時間はありますから。』と言ってくださいました。何のためらいもなく『では、お願ひします』と、私はその場では返事をしたのだが、9月に手渡された48号のゲラを見て私は絶句してしまった。1000種を越える昆虫の学名を含むリストと採集データは、なんと64ページにもなっていたのだった。私もしばらくの間は和文タイプを叩いていたので、あい小さな活字ではほぼベタ打ちの60ページが、いかに大変な労力を必要としたかはすぐに理解することができた。もちろん、これだけのデータを集積したのは、この調査に参加した会員諸氏の熱意によるものであろうが、石戸宿の桜堤でニコニコしながら灯火採集を繰り返していた市川先生の、この地の調査にかける意気込みを、私は、印刷所からあがってきた48号のズシッとした重さのなかに確かに感じ取ることができた。この『市川和夫氏 こだわりの1冊』とでも言うべき“寄せ蛾記”48号は、オオイチモンジシマゲンゴロウの時と同様、新聞各紙に資料と共に提供されたが、大宮台地の一角に1000種を越える昆虫が生息していた事を明らかにしたこの冊子は、珍しいゲンゴロウがいたというニュース以上にインパクトの強いものであり、各紙ともゲンゴロウの時以上にスペースを割いて報道していた。

私は、埼玉昆虫談話会という昆虫同好会の存在を一般の人々や行政が認識することに、この“寄せ蛾記48号”が果たした役割はたいへん大きなものだったと考えている。

夏の宿泊談話会

8月9～10日、栃木県奥塩原温泉。27名参加。

1987年(S.62)《寄せ蛾記 No.49～50. Supplement 3 [寄せ蛾記総目次 No.1-No.50]・会員名簿 1987年度版・雑記蝶 No.1～2》

宿泊新年会、今年も

1月31～2月1日、狭山智光山公園にて。17名参加。

◇ 市川先生、ワープロを購入

出来上がった“寄せ蛾記”をお勤め先の養護教員養成所に運び込む度に、市川先生は、明朝体の他にもゴチック体や教科書体、倍角・4倍角を用いたワープロによる版下にたいへん興味をもたれ、入力の方法からファイル管理の仕方、各メーカーの機種の特徴など、随分いろいろと質問された。そのうち、『私のために、碓井さんお薦めの1台を購入する段取りをつけてください。』と言われたので、当然、互換性を考えて会の所有しているSHARP製のものを選んで購入の手配をしたのだが、それからしばらくの間は私の勤務先や自宅に、ワープロ操作に関する質問の電話を随分といたいただいた。この熱意は、やがて『SHARPミニ書院用：埼玉県産蛾類の、種番号・学名／和名ユーザー辞書』の作成に結び付いていく。これは、蛾類大図鑑の種番号を入力すると、その種の学名と和名が呼び出されるというスグレ物のユーザー辞書で、先生のご自慢でもあった。

総会

シラサギ記念博物館にて、23名参加。

50号記念号発行、会員名簿・総目次も相次いで

顧問の先生方にお願いした特別寄稿5編が巻頭を飾った50号記念号が発行される。金曜セミナーなどで要望の強かった“会員名簿”も、1年前から名簿用のハガキを各会員に郵送して準備をしていたのだが、市川先生は、このハガキが返送されて来ない会員・会費滞納が長期にわたっている会員の扱いを、たいへん苦慮しておられた。この会員名簿発行に際してどう扱うかかなり悩んでおられたが、結局、会の財政をこれ以上逼迫させないためにも『認定退会』ということをはじめて決心された。この年の6月の時点で、『認定退会』約10名を除き会員数157名。増補第3号は〔寄せ蛾記総目次 No.1-No.50〕。

連絡誌“雑記蝶”創刊

連絡誌を出して欲しい、という要望は、金曜セミナーでかなり以前からでていた。それは、金曜セミナーの一人一話の内容を、ぜひ連絡誌で全会員に伝えて欲しい、というものであった。確かに、ゼミで皆さんのお話しを聞いていると、これはみんなに伝えたい、と言う話題が少くないのですが、毎回20名を越える出席者の一人一話を漏れなくメモするのはとても無理な事。連絡誌“雑記蝶”は、会のイベントを会員に伝えたり、会員相互のコミュニケーションに使えればよいのではないか、という意図で、私が編集担当、Macintosh Plusによる簡易DTPで創刊された。

夏の宿泊談話会

8月8～9日、群馬県利根郡上の大原高原にて。32名参加。

「なぜなぜ生き物博覧会」贊助出品

7月30日～8月11日に浦和伊勢丹にて開催された同展に、当会は贊助のかたちで標本各種を出品。

◇ 市川先生、バリ島へ

この年の暮れ、市川先生はバリ島へ採集旅行に。

1988年(S.63)《寄せ蛾記 No.51～53、雑記蝶 No.3～5》

宿泊新年会

1月30～31日、入間市【入間グリーンロッジ】にて、18名参加。

◇ 市川先生、加治丘陵調査・小鹿野／吉田『合角ダム』水没地域総合調査

この年度と翌年、入間・飯能にまたがる加治丘陵調査に関わる。また、合角ダムの調査員のお仕事は、この年度から1992年まで。

ミドリシジミ元年

この年、いよいよ『県の蝶・ミドリシジミ』に関する様々な活動が始まる。

それまでも、市川先生はミドリシジミを県の蝶に制定したい旨の発言をしていたが（荒川総合調査I, 1986, 埼玉県, 【埼玉の蝶のお話し会】、於:シラサギ記念博物館, 1987），“寄せ蛾記”51号に掲載された【「埼玉県の蝶」制定について、市川和夫】が、当会として『県の蝶・ミドリシジミ』を正式に表明した第1弾だろうと考えられる。これに先行して、毎日新聞（全国版）とNHK（テレビ・ラジオ）が、別件の取材にからんで市川先生の『県の蝶・ミドリシジミ』構想を知り、この年の1月にかなり大きなニュースとして報道したこと、金曜セミナーなどに参加されていない会員諸氏からは、事の経過が判らず、戸惑いを含んだ問い合わせが先生にいくつもあったようで、この先行報道による波紋に、先生は少なからず悩んでおられたようだった。

4月3日の総会では、“ミドリシジミを『埼玉県の蝶』に指定する（提案）”（提案者：牧林功）が決議され、同月6日には、この決議を受けて、先生は畠知事を公館に訪ね、県レベルで指定に取り組むよう要請した（次ページ、新聞記事参照）。

総会

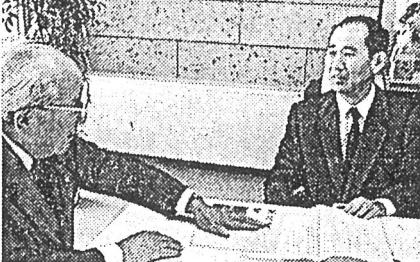
4月3日、嵐山町勤労福祉会館にて。37名参加。

見沼たんぽ地域の調査はじまる

1985年の北本市石戸宿での調査に続いて、この年と翌年の2年計画で川口・浦和・大宮にまたがる『見沼たんぽ』での調査が、巣瀬司氏を調査委員長に実施された。3地区それぞれに調査ステーションをつくり、3ヶ所同時に調査するという方法で、主に春から秋のシーズンの月1回・夜間採集を含む土日の調査を繰り返したが、この調査結果は1994年夏現在、まとめられていない。これは、当時この地区が政治的にもなかなか難しい地域で、調査結果を発表しても、それが当会の望まない方向で利用されることを懸念しての判断であった。もちろん、近いうちに、この“見沼たんぽ昆虫調査報告書”はまとめられる予定である。

ミドリシジミ県チョウに

埼玉昆虫談話会、県に指定要請



畠知事（左）に指定を要望する市川代表

「ミドリシジミ」を県のチョウに民間団体として指定した。市川代表は6日、知事公館にて「ミドリシジミ」を県のチョウに指定するよう要望した。

畠知事を訪ね、県が正式に県のチョウに指定するよう要望した。市川代表から「ミドリシジミ」とは、市川市を訪ね、県が正式に県のチョウに指定するよう要望した。

畠知事は、「ミドリシジミ」を県のチョウに指定するよう要望した。市川代表は6日、知事公館にて「ミドリシジミ」とは、市川市を訪ね、県が正式に県のチョウに指定するよう要望した。

とエサになるハンノキ（落葉樹）のかわり、同会の活動などの観測をうけた畠知事は、「緑を守り、チョウなど自然保護を考える上で大変よいこと。担当の環境部にさまざまな面から検討するよう指示しておこう」と答えた。

指定に関しては一般に「国（ヨウ）」とされているオオムラサキ（雄）の場合、環境省が指定したものではなく、日本昆虫学会の三十二年の決定が施行されたものだが、「他社に先駆けた指定は、県のイメージアップにつながる」と、知事も前向きな姿勢を見せていく。

読売新聞 1988年4月7日 朝刊

夏の宿泊談話会

8月6～7日、長野県佐久市『山荘あらふね』。39名参加。

◇ 日高町町史のお仕事

この秋より、日高町史『自然史編』刊行のための調査が始まり、市川先生は蛾類の調査員として従事（1991年度まで）。

1989年(平成元年)《寄せ蛾記 No.54. 雑記蝶 No. 6. ネオゼフィルス No. 1～6》**宿泊新年会**

2月4～5日、滑川町『松寿荘』にて。13名参加。

大喪の礼、金曜セミナー日程変更

2月の第83回ゼミの当日は、昭和天皇の死去による大喪の礼で、会場の喫茶店『ニューふじや』が臨時休業。急遽28日の木曜日に日程変更というハプニング。

◇ 中川水系総合調査 刊行事業・大滝村滝沢ダム水没地域総合調査会

市川先生は、この年度から表記の2つの事業に調査員として従事。

総会

4月2日、浦和市立青少年宇宙科学館にて。23名参加。

ミドリシジミ委員会設置

前年からの『県の蝶・ミドリシジミ』制定に向けての各種イベント・調査のために、委員会が組織された。委員長：牧林功、事務局：萩原昇・江村薰。

『ミドリシジミを知る集い』、開催される

ミドリシジミ委員会は、対外的にも『県の蝶・ミドリシジミ』制定をアピールする目的で、4月29日（みどりの日）に、浦和市立青少年宇宙科学館で第1回の『ミドリシジミを知る集い』を開催。事前に新聞でも報道されたおかげで約60名もの参加があり、大成功であった。

『郷土の蝶・ミドリシジミを見る集い』

勢いのあるミドリシジミ委員会は、“知る集い”の次には“見る集い”を企画。6月18日の日曜日、浦和市の秋ヶ瀬公園で40人近い参加者が集まり、これも大成功。新聞社やNHK

の取材もあり、『全国ではじめて“県の蝶”を制定する』という話題に対する県民の関心の高さを実感する。

“ネオゼフィルス”創刊

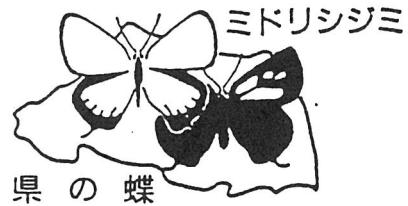
ミドリシジミ委員会のニューズレターとして、
“ネオゼフィルス”が7月に創刊される。

利根川雅実氏によるMacintosh SEを駆使しての編集。月刊で金曜セミナーの席上で配布される他、“寄せ蛾記”発送の際に全会員に同封されるかたちで配布される。

【郷土の蝶・ミドリシジミ】の、

キャンペーンマーク

“寄せ蛾記”郵送用の封筒左上に印刷されているミドリシジミ・マーク(矢野高広氏の作品)がこの夏に決定し、名刺にまで刷り込む会員がでてきた。



【郷土の蝶・ミドリシジミ】をアピールするイベント・展示コーナー、各地で

【浦和：特別展「郷土の蝶・ミドリシジミとその仲間たち」. 7/28~8/27; シラサギ記念博物館】

【熊谷：埼玉の四季と動物たち—自然科学展. 7/22~8/30; 熊谷市立図書館】

【秩父：夏休み「親と子の自然教室」. 8/10~8/14; 矢尾百貨店】

夏の宿泊談話会

8月5~6日、秩父郡大滝村三峰山『民宿みつみね』にて。40名参加。日曜日は、大雨注意報がでて参加者のほとんどが逃げるように帰路につく。

さいたま大好き大寄り合い

11月19日、浦和の別所沼会館で開催されたこのイベントに、ミドリシジミ委員会の牧林委員長が招かれて講演。

1990年(H.2)《寄せ蛾記 No.55~57. 雑記蝶 No.7. ネオゼフィルス No.7~18》

宿泊新年会

2月10~11日、川越市伊佐沼『国民年金保養センター むさしの』。11名参加。

総会

4月1日、鳩山町中央公民館にて。24名参加。

新代表 牧林 功 氏

総会にて、当会の代表に牧林功氏が選ばれる。市川先生は顧問に。

◇ 北本市史編さん事業・小鹿野町自然環境調査

市川先生、同事業の執筆者・調査員としてこの年度より従事。

第2回 ミドリシジミを知る集い

4月29日、埼玉会館にて。約70名の参加。

第2回 ミドリシジミを見る集い

前回同様、浦和市秋ヶ瀬公園にて6月24日に開催。事前の、マスコミを通じての報道が効を奏してか、100名の参加があり大盛況。

鱗翅学会・蝶類保護セミナー

大阪で開催された第1回のセミナーに、牧林代表が、「郷土の蝶・ミドリシジミ」制定を巡る当会の取り組みなどを報告。

夏の宿泊談話会

8月4~5日、群馬県榛名山にて。33名参加。

パソコンを寄贈される

ソフトウエア開発会社の(有)テグレット技術開発より、「収益の一部を社会に還元する」主旨で、当会に対してNEC社製のノート型パソコンの寄贈があった。

さいたま大好き大寄り合い

昨年に引き続き、11月23日、伊奈町の県民活動センターで開催されたこのイベントに、ミドリシジミ委員会の牧林委員長が招かれて講演。

東上線沿線をおもしろくする仕事人の会

12月12日、このイベントに矢野高広氏が参加、「ミドリシジミと東上線沿線で見られるチヨウ」というテーマで講演。

◇ 市川先生、ジャワへ

12月下旬に10日ほどジャワへ採集行。

1991年(H.3)《寄せ蛾記 No.58~62. 雑記蝶 No.8~11. ネオゼフィルス No.19~30》

第3回 ミドリシジミを見る集い

1月15日、『冬のインセクトウォッチング』と題した、ミドリシジミの卵の観察を中心に、豚汁のご馳走付きのこのイベントは、なんと130名の参加があった。後日、NHKなども当日の様子を放映。

宿泊新年会

2月2~3日、吉見町 フレンドシップハイツにて。12名参加。

総会、会則の制定・新体制・会費の値上げ

3月31日、伊奈町埼玉県県民活動センターにて。42名参加。

ミドリシジミの事などで、対外的にも各種団体などと接触する機会が増えた事を踏まえ、埼玉昆虫談話会の体制を整備する提案がいくつかなされ、承認された。これまでの“代表”を“会長”とし、4名の幹事と4名の編集委員をおいて、当会初めての会則を定めた。

私が“寄せ蛾記”的編集を引き継いだ10年ほど前、市川先生に会の運営のことなどについてお話しをお聞きしたことがあったが、先生は「今は、会員も少なく、お互いが好きなように会に関わればよいことで、会長などというものは置かなくても何かあつたら代表者として顔を出すだけの立場でよいですよ。会則もいらないけれど、会員が100人、200人になったら、そうもいかないでしょうね。いつかは、きちんとした組織にしなければならないでしょう。ですから、今は、会誌も、出せるときに出す、という風に気楽に考えて楽しく作ってください。」と言われ、とても気楽に会誌の編集を引き継ぐことができたと記憶している。

なんとなく、その当時の気持ちの今まで10年間“寄せ蛾記”を編集してここまで来てしまったのだが、気がつけば、会員は200名に達し、対外的にも責任ある発言と行動を要求されるだけの存在になってしまっていた。この現実を、私はこの総会ではじめて意識したのだった。

会費は、それまでの“本誌4号分2000円”から、“1年間3000円、ただし高校生まで2000円”となる。

◇ 市川先生、養護教員養成所を定年でご退職

ご退職の2年ほど前から、『1年間くらいは、退職後の生活のために準備期間をください』と言っておられたとおり、前春からこの時まで、会の代表を降りられ、お勤め先に保管されていた会の所有物（主に、バックナンバーと交換会誌）をきれいに分類・整理を付け、満を持してのご退職だった。

6月に発行された“雑記蝶9号”には、市川先生の奥様が3月に書かれた散文「定年前奏曲」が掲載され、これを読まれた会員、そして会員の奥様方から『とても雰囲気のよく伝わってくる、虫屋（の妻）として納得のいく文章だった』と、話題となつた。

◇ 戸田市立郷土博物館 瞽託研究員に

戸田の博物館で沢山の標本と資料に囲まれて、市川先生は本当に楽しそうにお仕事をされていた。それまで、金曜セミナーにはよほどのことが無いかぎり出席されていたのが、急にゼミにおいてにならないことが多くなり、『市川先生は最近どうしたの？』という声を、ゼミでたびたび耳にした。秩父方面の調査もいくつか引き受けられておられたので、金曜から日曜にかけて県北方面で夜間採集のハシゴを頻繁に計画され、ゼミにも出られない状況があることも知っていたが、1年前に埼玉昆虫談話会の代表をおられ、戸田での充実したお仕事振りを拝見していると、私は、先生を戸田市立郷土博物館にとられてしまつたような錯覚に陥り、何やら寂しいような気持ちを日々感じていた。『博物館で夕方まで仕事をしてから自宅に戻ると、（金曜セミナーの会場である）大宮はなかなか遠くて…』とも洩らしておられた。

◇ 北本市自然依託調査・東村山市史『自然編』編さん事業

市川先生、この年より『北本市自然依託調査調査』の総括責任者、東村山市史『自然編』編さん事業の主任調査員となる。

第3回 ミドリシジミを知る集い

4月29日、埼玉会館にて。60名の参加。

テレビ埼玉にて“金曜セミナー”デビュー

同局の『生きがい探訪』という番組の5月放映分は、牧林功会長と秩父在住の平沢和夫会員両氏の、虫と関わってきた人生の紹介を中心に構成された番組で、一部金曜セミナーの様子も挟みみたいとのことで、4月のゼミにはテレビ局のスタッフも数名参加。この番組は5月20日に放映された。

第2回 日本鱗翅学会セミナーは浦和にて

『蝶類の保護・・・自然保護の一環として』というテーマの本セミナーは、当会共催で6月29・30日の両日、浦和の別所会館にて行なわれた。セミナーの委員長は牧林功氏、市川先生も、二日目の『各論1、保護の現状』の中で第1テーマの座長を務められた。参加者は、日曜日の“第4回 ミドリシジミを見る集い”にも参加することができた。

第4回 ミドリシジミを見る集い

6月30日、浦和市秋ヶ瀬公園にて。80名の参加。

夏の宿泊談話会、秩父郡大滝村にて

栃木集落の上にある民宿『五望』にて、27名参加。

◇ 市川先生、ヨーロッパへ

9月から10月にかけての約1カ月、南フランス・イスラエルなどを行なった観光兼採集。特に、フランスで訪れた“ファーブルの家”には、とても感動しておられたようだった。

【埼玉 昆虫の世界・ファーブルの夏休み】展

『県の蝶 制定』の雰囲気作りをからめて、8月1日から9月8日まで埼玉会館と共に開催された昆虫展は会期中8000人を超える入場者があり、大成功であった。この流れに連動して、4月2日から5月9日までは朝日新聞埼玉版で『埼玉バタフライ物語』が、8月1日から28日までは埼玉新聞で『埼玉 昆虫の世界』が、会員諸氏の生態写真と執筆によって連載された（掲載日不定、それぞれ15回）。

◇ 市川先生と小豆島とファーブル

私の手元に『小豆島の自然環境調査報告 — 小豆郡内海町のエコシステムとサイエンスミュージアム構想の可能性 —』という冊子がある。タイトル通り、瀬戸内海に浮かぶ小豆島の自然環境調査の報告書で1991年秋に発行されたもので、市川先生はある経緯でこの調査に関わっておられたのだが、この冊子の中で先生（報告者）は、常日頃思い描いておられた“子供たちが楽しく自然と関わりあえる理想の風景”を描写されている。この数年で先生が特にこだわっておられたアンリ・ファーブルをイメージの中に織り交ぜたその文章を、ここに引用しておきたい。

※

※

※

〔昆虫+子供〕に関する展望

小豆島はチャイルドサイエンスのフィールドとして絶好のエリアが存在することが確認できた。そこで、主として昆虫を観察、採集、飼育、研究することを念頭において考察してみた。

まず、『ファーブルルーム』であるが、これを『チャイルド・サイエンス・ホテル』内にとりこむことは是非については慎重でありたい。報告者はむしろ用地の大部分に自然状態に近い林（備長炭の原料となったこの付近の原風景を形成するウバメガシを主とする）と草地（暖温帯の植物）を造成し、『ホテル』はその周辺の一部に建設する。それは、宿泊設備とミュージアムと天体観測施設くらいにする。そして、造成した自然の林地や草地すなはち「自然観察園」のそこここにサイエンスする施設である『ファーブルの館』『ニュートン館』などを点在させたい。

『ファーブルの館』は子供達が昆虫と付き合う場所である。飼育したり、標本を作成したり、採集するための道具を備えておき、やらせるのではなく、子供が

やりたいと思ったことができるようにしておけばよい。

『ファーブルの館』のちかくには、八幡神社、映画村、碁石山、栗地ダム、神懸、など素晴らしい自然が存在するから、エコシステム研究はいくらでもできる。小豆島は自然の中ですでに発見する喜びを味わってもらう。

ファーブルが晩年過ごしたセリニヤンの『ジャン・アンリ・ファーブルのアルマス（荒地）：現在の国立自然史博物館』は、かなり広い植物園のなかに小さな二階建の研究室が昔のまま保存されていて、西方には自然が豊かなバントウ山が見え、昆虫観察や採集の適地であるという。今にも年老いたファーブルが虫眼鏡（ルーペ）を片手に歩いて来るかもしれないという雰囲気である。

これと同じような施設が小豆島に完成するのが報告者の夢である。朝食を済ませた子供のうち、生物好きは『ホテル』を出て歩いて『ファーブルの館』に行く。館には、子供達の知的相談相手がいつも待機していて、素晴らしい体験ができるように付き合ってくれる。どうしてよいか知らない子には適当なサゼッションを与える。自分からやる気のある子にはやり易いようにさせる。決して積極的に教えてやらせるような学校的な教育はしないようとする・・・・これが理想である。

『ファーブルの館』そのものの建設はあまり問題はないと思われるが、この理想が実現するための最大の隘路は、良き『相談相手』となれる『人』の確保であろう。しかし、今や生涯学習の時代である。定年を迎えた方のなかに良い人がいるし、わかいひとの中にもこのような理想を理解してやる気になる人がきっといるにちがいない。そういう人が得られたとき、すでに建設目的の80%以上は達成されたと言えよう。

(市川和夫：1991年9月3日)

※ ※ ※

退職された年の誕生日の日付で書かれたこの文章は、先生ご自身のための覚え書きのようでもあり、私達へのメッセージのようでもあり、読んでいると、私達がフィールドや金曜セミナーや博物館で見ていたいつもの先生の姿がそのまま浮かび上がってくる気がする。

ついに『県の蝶 ミドリシジミ』決定

11月14日の県民の日、『さいたま120年記念事業：県民のつどい』において、待ちに待った『県の蝶 ミドリシジミ』制定が、畠和知事より発表された。

展示会『ミドリシジミとその仲間たち』

『県の蝶 ミドリシジミ』キャンペーンの一環として、浦和市青少年宇宙科学館にて、10月8日から11月30日にかけて展示会がひらかれた。

『さいたまの蝶・ミドリシジミ』のキャンペーン

マーク、第2弾
『県の蝶 ミドリシジミ』決定を記念して、当会のシンボルマークを、小堀文彦氏がアレンジして作ったもの。“寄せ蛾記”郵送用封筒にも、しばらくの間使用していた。

埼玉こども祭りに参加

10月20日、伊奈町の県民活動センターで開催された、第2回埼玉こども祭りに、“昆虫の部屋”でエントリー。好評を博す。

1992年(H.4)《寄せ蛾記 No.63~65. 雜記蝶 No.12~14. ネオゼフィルス No.31~33. 縁友路地 No.1》

宿泊新年会中止

越生の『厚生年金休暇センター』を予約しておいたが、参加希望者が少なく（新年会の常連会員が、軒並み多忙で不参加となったため），この年の新年会は中止となった。1985年以後、7年続いた有志による宿泊新年会も、ちょっと一休みとなった。



トンボ市民サミット後援

寄居町で3月下旬にひらかれた“第3回トンボ市民サミット”を後援。当会からも宿泊を含め数名参加。

ミドリシジミ委員会解散，“ネオゼフィルス”終刊

多方面にわたって大活躍した『ミドリシジミ委員会』は、その使命を果たして解散、同委員会の広報誌だった“ネオゼフィルス”も3月発行の33号で終刊となった。

“寄せ蛾記”63号、ミドリシジミ特集号

【県の蝶 ミドリシジミ】誕生を記念して、ミドリシジミに関する論文・報文だけを満載した63号は、84ページにカラーコピーによる1プレート付きという豪華版。

◇ 岐玉町史・小川町史編さん事業に従事

この年より、市川先生は、児玉町の町史編さん事業に専門委員として鱗翅類の調査を担当。小川町史の方でも鱗翅類の調査員として従事。

総会、大宮市にて

4月5日、大宮市見沼グリーンセンターにて。24名参加。

夏の宿泊談話会、群馬県武尊山

8月8日～9日、32名参加。関東地方に接近した台風9号の影響で、9日朝は嵐。逃げるように下山するが、次第に天候は回復した。

◇ 市川先生、インドへ

9月に2週間ほどインドへ採集行。

埼玉昆虫談話会創立30周年事業“埼玉県昆虫誌”

連絡誌“縁友路地”

1993年は当会発足30周年ということでのどのような記念事業をしようか検討する中で、1996年の刊行を目指して“埼玉県昆虫誌”作成に取り組むことが決まった。その事業の情報誌として“縁友路地”が12月に創刊される。編集は、“ネオゼフィルス”で腕を奮った利根川雅実氏によるMacでのDTP。毎月、金曜セミナーで配布される。同事業のシンボルマークも小堀文彦氏の手によって作成される。

1993年(H. 5)《寄せ蛾記 No.66～69. 雑記蝶 No.15～17. 縁友路地 No. 2～13. 会員名簿1992年版》

宿泊新年会

2月6～7日、滑川町『松寿荘』にて。8名参加。

会員名簿 新版

1987年版とはほぼ同じ体裁で、1992年版が発行される。会員数217名。

総会

3月28日、北本市石戸宿の自然学習センターにて。28名参加。

◇ 江南町史・神泉村史編さん事業に従事

この年より、市川先生は、江南町の町史編さん事業・神泉村の村史編さん事業に、鱗翅類の調査員として従事。

毎月採集調査会はじまる

創立30周年事業“埼玉県昆虫誌”的関連イベントとして、“ディスカヴァーご近所”的キヤッピコリーの下、星野正博氏を座長に、シーズン中毎月1会の採集調査会が組まれることになった。第1回は4月25日、吉見町八丁湖にて。

テレビ埼玉より表彰される

同局の開局15周年記念『日本一のふるさとづくりの集い』という企画において、当会が表



彰される。

ミドリシジミを見る集い 2会場にて

6月27日、浦和市秋ヶ瀬公園と伊奈町伊奈氏屋敷跡にて同時開催。

夏の宿泊談話会、赤城山へ

7月31日～8月1日、ゼフィルスのメッカ、赤城山での宿泊談話会は34名の参加。記録的な冷夏のせいで、ゼフの発生期はドンピシャリ。

昆虫なんでも相談会

戸田市立郷土博物館にて。8月22・29日の両日開催。

◆ 市川和夫先生 逝去

9月18日、小川町での夜間採集の帰路、吉見町での交通事故により逝去。享年63才。

NHK TV “ファイト” 出演

9月18日放映の『ファイト：埼玉昆虫談話会 vs 名古屋昆虫俱楽部』に、当会から矢野高広・小堀文彦・平野進一郎・江村圭一郎・渋谷美穂子の5名が出演。

第4回 埼玉こども祭りに参加

10月24日、県民活動センターにて。今回も『昆虫の部屋』は大盛況。

埼玉県より表彰される

11月15日、当会は“さいたま地球環境賞 優秀賞”を受賞。

“昆虫の同定を依頼しあう会”

“埼玉県昆虫誌”刊行にむけて、手持ちの標本の同定をしっかりとするとともにデータ集積の狙いも含めて、表題の集まりが11月28日に北本市石戸宿の埼玉県自然学習センターで開催される。あわせて、“埼玉県昆虫誌”的編集会議も。第2回は、1994年2月20日、同所にて。

1993年度終了（1994年3月末日）までに、“寄せ蛾記”は71号，“雑記蝶”19号，“縁友路地”は16号まで発行。

市川和先生業績目録

(文責 碓井 徹)

先生の業績は昆虫の世界はもとより、高校理科教育の分野・環境教育など多岐にわたり、一口に業績一覧といつても、かなりの量になることはあきらかであった。ここでは、当会の性格を考え、昆虫を主とする『自然環境』にかかる論文・報文・書籍などに限定して目録を作成した。

なお、本目録を作成するにあたり、赤羽トモ子・南部敏明・野沢雅美・星野正博・萩原昇の各氏には特にお世話になった。

- 市川和夫 (1946) アゲハテフの飼育による小型化の研究. 自然研究, (1):43-44.
- (1950) 奥秩父学術総合調査昆虫類報告書 (1) (秩父盆地及び周辺の山地の昆虫), 秩父自然科学博物館研究報告 (2): 89-105.
- (1953) 奥秩父学術総合調査昆虫類報告書 (2) (秩父の蛾類), 秩父自然科学博物館研究報告 (4): 7-11.
- (1954) 浦和附近の蝶について. むらさき (浦和市立高校生物部), 4(1):6-8.
- (1955) 浦和市産スズメガ. むらさき 6 (1).
- (1958) 奥秩父学術総合調査昆虫類報告書 (3) (秩父の蝶類). 秩父自然科学博物館研究報告 (8): 9-18.
- (1959) 埼玉県の蛾類(1)スズメガ科. 埼玉生物 (埼玉県高等学校生物研究会), (1):16-19.
- (1960) 埼玉県の蛾類 (主にシャチホコガ科について), 浦和の教育 (浦和市教育委員会発行) :107-119.
- (1960) : 埼玉県の蛾類(2)スズメガ科. 埼玉生物, (2):10.
- (1961) 埼玉県の蛾類(3)スズメガ科・トラガ科. 埼玉生物, (3):15-17.
- (1962) 秩父地方の蛾類に関する研究. 秩父自然科学博物館研究報告, (11):57-96.
- (1963) 知床地方の蛾. PURURA (浦和市立高校生物研究会), (1)
- (1965) 会の成り立ちについて. 寄せ蛾記, (1):1.
- (1965) ヒサゴスズメの採集記録. 寄せ蛾記, (1):3.
- (1965) : 「幼虫飼育ノート」マダラツマキリヨトウの幼虫. 寄せ蛾記, (1):3-4.
- (1965) 埼玉地方のシャチホコガ科の追加記録※. 寄せ蛾記, (2):7-8.
- 斎藤良夫 ······ (1965) 飯豊地方の甲虫と蛾. PURPURA, (3):65-70.
- (1966) 北アルプスの蛾 原 聖樹氏採集の蛾 (1). 寄せ蛾記, (4):15-16.
- (1966) ヤママユガ科2種の記録. 寄せ蛾記, (4):19.
- 並木彬雄 (1966) 埼玉地方のOrthosia属について. 寄せ蛾記, (6):29-32.
- (1966) 三峰山のヤガ3種. 寄せ蛾記, (6):33.
- (1966) 埼玉地方のシャチホコガ科の採集記録. 寄せ蛾記, (7):37.
- (1966) 埼玉県における若干のヤガ科の記録, 蛾類通信, (41):376.
- (1966) 宝登山の蛾, こぶし (秩父自然科学博物館報), (3):18.
- (1966) 埼玉県産の蛾6種の追加. 埼玉生物, (6):33.
- (1966) ネスジシャチホコの新産地、昆虫と自然, 1(1):23.
- (1966) 谷川岳付近の蛾 一原聖樹氏採集の蛾(2)一. 寄せ蛾記, (7):39.
- (1966) 谷川岳のヤガ科4種. 寄せ蛾記, (7):39.
- (1966) 屋久島の夏の蛾若干, 蛾類通信, (43):415.
- (1966) 屋久島の報告, 利尻島の報告, 蛾類通信, (45):415-416.
- (1967) 秩父地方で採集した若干のヤガ. 寄せ蛾記, (9):51-51.
- (1967) 日野春付近の蛾 原聖樹氏採集の蛾 (3). 寄せ蛾記, (11):64.
- (1968) 関東での暖地性ヤガ4種について. 昆虫と自然, 3(3):10.
- (1971) 埼玉地方のOrthosia属について, 埼玉生物, (11):15-16.
- (1971) 陸生昆虫調査報告, 鱗翅類, 埼玉県動物誌仮目録(1), 昭和46年度基本調査報告 :67-77.
- (1972) 陸生昆虫調査報告, 鱗翅類, 埼玉県動物誌仮目録(2), 昭和47年度基本調査報告 :103-114.
- (1973) 埼玉県動物誌仮目録 (昆虫網, 鱗翅類) 埼玉の蛾, 埼玉県動物誌仮目録第3集:32-89.
- (1973) 埼玉県秩父地方でムモンアカシジミ・エゾミドリシジミ・キマダラモドキを採集. 昆虫と自然, 8(12):2-3.

- (1973) 埼玉県でのエゾスジグロシロチョウの採集例. 昆虫と自然, 8(12):3.
- (1975) ふるさとの蛾お国めぐり(9)埼玉県, やどりが(89):13-15.
- (1974) 埼玉県動物誌基礎調査の概要. 埼玉生物, (14):20.
- 並木彬雄 · —— (1975) 埼玉地方のCatocala属について. 寄せ蛾記, (13):71-77.
- (1975) 日光国立公園尾瀬ヶ原の蛾. 寄せ蛾記, (14):83-84.
- (1975) 上福岡でコエビガラスズメ. 寄せ蛾記, (14):86.
- (1975) オナガミズアオの幼虫はハンノキにつく. 寄せ蛾記, (15):89.
- (1976) 奥秩父の蛾 碓井徹氏採集の蛾. 寄せ蛾記, (16):103-104.
- (1976) コウモリの餌となった蛾の種類. 寄せ蛾記, (16):105-108.
- (1976) 埼玉県では採集例の少い蝶の1975年における記録※. 寄せ蛾記, (17):120.
- (1976) 入間郡越生町の蛾※. 寄せ蛾記, (18):123.
- (1976) ヨツモンキヌガの飼育記録. 寄せ蛾記, (18):123.
- (1976) 岩槻市慈恩寺の8月と9月の蛾. 寄せ蛾記, (18):124-125.
- (1976) 美の山(簗山)探蝶記. 寄せ蛾記, (18):129.
- (1976) オオイチモンジ破不山で採れる. 寄せ蛾記, (18):132.
- (1976) 両神山麓清滝小屋の蛾. 寄せ蛾記, (19):133-135.
- (1976) 大宮市深作沼の3種のイトトンボ. 寄せ蛾記, (19):139.
- (1976) 大滝村二瀬と三峰山の蛾※. 寄せ蛾記, (19):140-142.
- (1977) クロスジフユエダシャクの交尾行動. 寄せ蛾記, (20):156.
- (1977) (研究会報告)動物の部 3. 鱗翅類(蝶類)調査報告. 埼玉生物, (17):37.
- (1977) 帰化植物と昆虫. FAMILY(県立浦和高等学校生物部), 26:4-5.
- (1977) 蝶たちの世界. 埼玉・人とこころ(埼玉文化懇談会).
- (1978) (石川県)白山の蛾. 寄せ蛾記, (21):162.
- (1978) 主として北陸地方のガ13種の記録. 寄せ蛾記, (23):185.
- 原聖樹 (1978) 埼玉県の蝶類. 埼玉県動物誌, 259-298.
- (1978) 埼玉県の蛾類. 埼玉県動物誌, 299-354.
- (1978) 帰化動物と埼玉における現状. 埼玉県動物誌, 535-545.
- 山崎柄根 · —— (1978) 埼玉県内のハルゼミの分布. CICADA, 1(1):10-11.
- (1979) 浦和でミドリヒヨウモン. 寄せ蛾記, (25):203.
- (1979) 1979年モンシロチョウの初見日. 寄せ蛾記, (25):208.
- (1979) 秩父市浦山地方の蛾. 寄せ蛾記, (26):216.
- 清水誠 · —— (1979) 田島ヶ原サクラソウ自生地と秋ヶ瀬自然公園. 遺伝, 33(4):88-97.
- (1980) 埼玉県動物誌に追加する蛾類の記録. 寄せ蛾記, (27):220-221.
- (1980) 浦和でウラギンシジミを目撃. 寄せ蛾記, (27):221.
- (1980) ウラギンヨトウ埼玉県で採集. 寄せ蛾記, (27):221.
- (1980) 種子島の甲虫. 寄せ蛾記, (28):232.
- (1980) ウラキンシジミを破風山(吉田町)で採集. 寄せ蛾記, (28):234.
- (1980) 隠岐島の蛾3種. 寄せ蛾記, (29):243.
- (1980) 北海道7月下旬のシャチホコガ. 寄せ蛾記, (29):244.
- (1980) 埼玉県動物誌に追加するガ類の記録. 寄せ蛾記, (30):245-248.
- (1980) 北海道7月下旬のヤガ類. 寄せ蛾記, (30):256-257.
- 小杉昭光 · —— (1980) 「埼玉県動物誌」あれこれ. 埼玉生物, (20):12-13.
- (1980) 浦山川流域動・植物総合調査会報告 鱗翅目(蛾の部). 埼玉生物, (20):98.
- 斎藤良夫 (1980) 深作沼の動物(無脊椎動物). 深作沼動植物調査報告, 63-93.
- (1981) 埼玉県動物誌に追加する蛾類(2). 寄せ蛾記, (31):268-269.
- (1981) 埼玉の低山地におけるナカジロシタバの採集例. 寄せ蛾記, (31):269.
- (1981) アメリカシロヒトリが低山地で採れる. 寄せ蛾記, (31):269.
- (1981) ハルゼミの記録. 寄せ蛾記, (32):285.
- (1981) フタトガリコヤガの記録. 寄せ蛾記, (32):285.
- (1981) 秩父郡大滝村川又の蛾. 寄せ蛾記, (33):298-301.
- (1981) セスジスカシバの採集記録. 寄せ蛾記, (33):309.
- (1981) 銀山平(足尾町)初冬の蛾10種. 寄せ蛾記, (34):328.
- (1981) 上尾市平塚の蝶2種の記録. 寄せ蛾記, (34):329.
- 碓井徹 (1982) 埼玉県蝶類分布図の作成について. 寄せ蛾記, (36):378-380.
- 碓井徹 (1982) スモモの果実に集まる蛾. 寄せ蛾記, (37):412.
- (1982) アオマツムシが浦和に大発生※. 寄せ蛾記, (38):439-440.
- (1983) 「埼玉県の蝶類」に関する訂正の追加. 寄せ蛾記, (39):461.
- (1983) マエシロモンキノカワガの最北記録. 寄せ蛾記, (40):490.

- (1984) 小笠原諸島の夏のヤガ類. 寄せ蛾記, (42):549.
- (1984) 三峰でミドリリンガを3頭採集※. 寄せ蛾記, (42):550.
- (1984) 蛾類【所沢市三ヶ島の昆虫類調査報告】. 寄せ蛾記, (Sup.2):11-19.
- (1985) 岐阜郡神川村の秋の蝶. 寄せ蛾記, (44):599.
- (1985) 5月下旬、月山々麓姥沢小屋附近の蛾. 寄せ蛾記, (45):624-626.
- (1985) 埼玉県のアサマシジミ. 昆虫と自然, 20(5):11-15.
- · 南部敏明 (1985) 分布資料 大里郡寄居町の蛾. 埼玉県動物研通信 (埼玉県動物研究会), (1):17-20.
- · 斎藤弥吉 (1985) 浦和市馬場小室山遺跡の植生. 浦和市史調査報告書 第17集 自然編, 167-171.
- (1985) 浦和の動物に関する文献について. 浦和市史調査報告書 第17集 自然編, 184-194.
- (1985) 浦和市内のモンシロチョウ属 (Pieris) 2種類の分布. 浦和市史調査報告書 第17集 自然編, 173-183.
- (1985) 荒川本流の河川敷の陸生動物について. 荒川本流河川敷の陸生動物目録, 23-28.
- (1985) 蛾類. 荒川本流河川敷の陸生動物目録, 1.
- (1985) 名栗渓谷の動物たち. 月刊 武州路, (143):26-27.
- (1986) (長野県) 桦山の夏の蛾. 寄せ蛾記, (46):651-654.
- (1986) トカラ列島の蛾. 寄せ蛾記, (47):674-675.
- (1986) 北本市石戸宿の蛾類. 寄せ蛾記, (48):724-739.
- (1986) 秩父演習林自然環境調査報告書(S.61年度), 東京大学農学部附属演習林:120-126.
- 戸田市の蛾. 戸田市立郷土博物館研究紀要 (第2号), :1-14.
- 第2回動植物総合調査会 鱗翅目—蛾類. 埼玉生物, (26):36-37.
- 分布資料 岐阜郡神川村の蝶と蛾. 埼玉県動物研通信, (3):19-20.
- 分布資料 岐阜郡神川村で吉田文作氏が採集した蝶. 埼玉県動物研通信, (3):20-21.
- 分布資料 越生町龍ヶ谷龍隱寺附近の蝶と蛾. 埼玉県動物研通信, (3):21.
- (1987) 月山々麓、8月上旬の蛾類. 寄せ蛾記, (49):767-770.
- · 碓井徹 (1987) 金峰小屋で灯火採集した蛾. 寄せ蛾記, (50):815-818.
- (1987) 神川村金鑽 (かなさな) 付近の蛾. 寄せ蛾記, (50):835-839.
- 井上寛 · —— (1987) ヤマダカレハについての記事の訂正. 寄せ蛾記, (50):844.
- (1987) 戸田市の蛾 —1986年の調査—. 研究紀要, (2):1-14.
- · 大垣晃一 (1987) 浦和の自然 生物界. 浦和市史 通史編 I, 第一編, 89-136.
- (1988) 秩父演習林自然環境調査報告書(S.62年度), 東京大学農学部附属演習林:26-35.
- · 利根川雅実 (1988) 暖冬の1988年1月における蛾の観察例. 寄せ蛾記, (51):887.
- (1988) 「埼玉県の蝶」制定について. 寄せ蛾記, (51):897-898.
- 利根川雅実 · —— (1988) 浦和市三室で採集した蛾. 寄せ蛾記, (52):927-928.
- · 碓井徹 (1988) 昭和62年度動植物総合調査結果 6. 甲武信小屋で燈火採集した蛾. 埼玉生物, (28):35.
- (1988) 両神山東麓の8月下旬の蛾. 埼玉県動物研通信, (6):11-16.
- (1988) わたしたちの自然観察路「見沼の里」. 子供の科学, 51(11):59-63.
- · 斎藤光一 (1988) しぜん キンダーブック3 “ちょう”.
- (1989) 戸田市の鱗翅類, チョウとガ. 戸田市動物誌, :183-212.
- (1989) 浦和市における蝶の消長と記録. 浦和市史研究, (4):1-21.
- (1989) 八重山列島の蛾 31種の採集記録. 寄せ蛾記, (54):969-971.
- (1990) 両神山東麓の8月下旬の蛾. 寄せ蛾記, (55):998-1003.
- (1990) 北本の陸生動物 (4, 昆虫類). 北本市史, 第3巻上, :235-345.
- 井上 寛 · —— (1990) 加治丘陵 (埼玉県入間市) の蛾類. 加治丘陵自然環境調査報告書, :1-37. 入間市加治丘陵自然環境調査研究会.
- · 原聖樹・巣瀬司・碓井徹・松本和馬 (1990) 埼玉県平野部のミヤマセセリをめぐって. 寄せ蛾記, (57):1055-1064.
- (1990) 狹山丘陵の昆虫. 日本の生物, 4(4):30-35.
- (1990) 蛾と私. みんなの自然史, (11):4.
- (1990) 埼玉の鱗翅類と蝶・蛾による環境評価. みんなの自然史, (12):4.
- (1990) タニガワモクメキリガなど甲子温泉の春の蛾. 誘蛾燈, (122):142.
- 碓井徹 · —— (1990) 三度崎 (隠岐島) の沖合で採集した蛾. すかしば (山陰むしの会), (34):18.
- · 川名美佐男 (1991) スマトラ島の蝶の記録. 寄せ蛾記, (59):1099-1100.
- · 碓井徹 (1991) 8月に採集した隠岐島の蛾. すかしば, (35):3-5.

- (1991) ニシキシマメイガの埼玉県からの記録. 蛾類通信, (161):179.
- · 氷室美芳 (1991) 埼玉県におけるクロモンシタバの採集例. 蛾類通信, (161):188.
- (1991) クスサンの雌雄型. 蛾類通信, (162):202-203.
- (1991) シンジュサンの雌雄型. 自然誌研究雑誌, (1):54.
- · 須藤和人・渋谷紘・清水誠 (1991) さいたまの自然ウォッチング.
- (1992) 荒川第一調節池の陸生昆虫(1)[5,鱗翅類(蛾類)]. 荒川第一調節池生物等調査報告書(1),:64-65.
- · 萩原 昇(1992) : 荒川第一調節池の陸生昆虫(2)[荒川第一調節池における灯火採集の結果]. 荒川第一調節池生物等調査報告書(2),:69-70.
- (1992) 埼玉県の蛾相について. 昆虫と自然, 27(2),:8-12.
- · 笠原喜久雄 (1992) ヒメイチモンジセセリを含む戸田市産の希少な蝶の記録. 戸田市立郷土博物館研究紀要 (7):7-9.
- (1992) 川口市原町の蛾類. 戸田市立郷土博物館研究紀要 (7):10-13.
- · 碓井徹 (1992) 隠岐島の8月初旬の蛾類. すかしば, (37/38):65-66.
- (1992) 埼玉県入間郡日高町の蛾類. 自然史編調査記録集, 46-79.
- · 碓井徹 (1993) 沖縄本島における蛾類の採集記録. 寄せ蛾記, (66):1435-1437.
- · 笠原喜久雄 (1993) 戸田市道満におけるオオカマキリの卵鞘. 戸田市立郷土博物館研究紀要 (8):8-10.
- · 笠原喜久雄 (1993) 戸田市動物誌に追加する昆虫類 (1). 戸田市立郷土博物館研究紀要 (8):11-16.
- (1993) 戸田市道満付近の蝶による環境評価. 戸田市立郷土博物館研究紀要 (8):22-26.
- (1993) 荒川第一調節池の陸生昆虫類(2). 荒川第一調節池生物等調査報告書 (2), 54-69.
- · 萩原昇 (1993) 荒川第1調節池における灯火採集の結果. 荒川第一調節池生物等調査報告書 (2), 69-70.
- (1993) 児玉町の鱗翅目(蛾類と蝶類). 児玉町史 自然編, 489-534.

以上の文献の他に、以下の書籍にも先生のお名前が見られる。これらは、ひとつひとつの報文が、執筆者名付きの独立した論文・報文のスタイルになっておらず、巻末などに、執筆者の一人として先生のお名前が出てくる。

- 埼玉郷土辞典 自然篇. 埼玉新聞社出版部. (1969) 多数の項目を執筆.
- 埼玉大百科事典 1~5. 埼玉新聞社. (1974-1975) 多数の項目を執筆.
- 埼玉昆虫談話会 (1984) 埼玉蝶の世界. 埼玉新聞社.
- 埼玉昆虫談話会 (1985) 昆虫観察テクニック. 日本交通公社.
- 埼玉昆虫談話会 (1985) 昆虫飼育テクニック. 日本交通公社.
- 埼玉県 (1987) 荒川自然 — 荒川総合調査報告書 1 —.
- 埼玉県 (1987) 写真集 荒川.
- 埼玉県新座市教育委員会 (1987) 国指定天然記念物 平林寺境内林保護増殖事業 — ヤマダカレハ関連・調査事業報告書 —. 平林寺虫害防除調査団.
- 北本市教育委員会 (1990) 北本市史 第三巻 上 自然・原始資料編.
- 戸田市立郷土博物館 (1991) 戸田市動物ガイド 複数の執筆者のひとり.
- 埼玉県入間郡日高町 (1991) 日高町史 自然史編.
- 埼玉県 (1992) 写真集 中川水系.
- 埼玉県 (1993) 中川水系 I 総論・II自然 中川水系総合調査報告書 1.
- 北本市教育委員会 (1994) 北本市史 第一巻 通史編 I.

市川さんが9月18日に採集した鱗翅類

矢野 高広

市川和夫さんは、1993年9月18日に小川町での灯火採集による調査の帰路、交通事故のため亡くなられたが、その当日、小川町で日中の調査（腰越地区）と夜間の灯火採集（栗山）で採集された蝶と蛾は、いくつかの経緯を経て筆者が標本を作成することになった。以下、その採集品のリストを書き記しておく。

なお、蛾類は、蛾類大図鑑の種番号を学名の前に表示している。採集日は1993年9月18日、採集者は市川和夫氏である。

小川町腰越

<i>Potanthus flavum</i>	キマダラセセリ	1♀
<i>Polytremis pellucida</i>	オオチャバネセセリ	3♂
<i>Parnara guttata</i>	イチモンジセセリ	3♂
<i>Pieris melete</i>	スジグロシロチョウ	1♂
<i>Taraka hamada</i>	ゴイシシジミ	1♂
<i>Damora sagana</i>	メスグロヒョウモン	2♂
<i>Argynnис paphia</i>	ミドリヒョウモン	1♂ 1♀
<i>Lethе sicelis</i>	ヒカゲチョウ	1♂

マダラガ科

1343 <i>Pidorus glaucopis</i>	ホタルガ	1♂ 2♀
-------------------------------	------	-------

フタオガ科

2943 <i>Psychostrophia melanargia</i>	キンモンガ	1♀
---------------------------------------	-------	----

スズメガ科

3044 <i>Macroglossum bombylans</i>	ヒメクロホウジャク	1♂
------------------------------------	-----------	----

小川町栗山（灯火採集）

メイガ科

1598 <i>Nacoleia commixta</i>	シロテンキノメイガ	1♂
1634 <i>Pleuroptya harutai</i>	オオキバラノメイガ	1♀
1648 <i>Palpta nigropunctalis</i>	マエアカスカシノメイガ	2♂

カギハガ科

2088 <i>Drepana curvatula</i>	オビカギバ	1♀
-------------------------------	-------	----

シャクガ科

2471 <i>Eustroma melancholicum</i>	ハガタナミシャク	1♂
2740 <i>Apocleora rimosa</i>	クロクモエダシャク	1♂
2752 <i>Alcis angulifera</i>	ナカウスエダシャク	1♂
2764 <i>Deileptenia ribeata</i>	マツオエダシャク	2♂ 2♀
2812 <i>Scionomia mendica</i>	ソトキクロエダシャク	1♂
2858 <i>Ctenognopos grandinaria</i>	ハガタキエダシャク	1 0♂
2885 <i>Odontopera arida</i>	エグリヅマエダシャク	1♂
2898 <i>Pareclipsis gracilis</i>	ツマキリウスキエダシャク	1♀

カレハガ科

2970 <i>Philudoria albomaculata</i>	タケカレハ	1♂
-------------------------------------	-------	----

オビガ科

2982 <i>Apha aequalis</i>	オビガ	2♂
---------------------------	-----	----

ヤママユガ科

2991 <i>Antheraea yamamai</i>	ヤママユ	1♀
-------------------------------	------	----

ドクガ科

3198	<i>Cifuna locuples</i>	マメドクガ	1 ♂
3199	<i>Neocifuna eurydice</i>	ブドウドクガ	1 ♂
3230	<i>Euproctis similis</i>	モンシロドクガ	1 ♂
3206	<i>Laelia gigantea</i>	スゲオドクガ	1 ♀

ヒトリガ科

3250	<i>Eilema griseola</i>	キシタホソバ	4 ♂
3268	<i>Lithosia quadra</i>	ヨソボシホソバ	2 ♂ 7 ♀
3281	<i>Melanaema venata</i>	オオベニヘリコケガ	1 ♀
3309	<i>Spilosoma seriatopunctata</i>	スジモンヒトリ	1 ♂
3316	<i>Spilosoma inaequalis</i>	カクモンヒトリ	4 ♂ 3 ♀

ヤガ科

3504	<i>Hermonassa cecilia</i>	クロクモヤガ	1 ♀
3513	<i>Sineugaphe exusta</i>	カバスジヤガ	1 ♀
3519	<i>Peridroma saucia</i>	ニセタマナヤガ	2 ♂
3515	<i>Sineugraphe longipennis</i>	オオカバスジヤガ	3 ♂ 3 ♀
3520	<i>Diarsia deparca</i>	コウスチャヤガ	2 ♂
3528	<i>Diarsia ruficauda</i>	ウスイロアカフヤガ	1 ♂
3537	<i>Xestia fuscostigma</i>	クロフトビイロヤガ	2 ♂
3535	<i>Xestia c-nigrum</i>	シロモンヤガ	4 ♂ 1 ♀
3539	<i>Xestia stupenda</i>	マエキヤガ	1 ♂
3559	<i>Mamestra brassicae</i>	ヨトウガ	1 ♂
3610	<i>Mythimna turca</i>	フタオビキヨトウ	1 ♂
3632	<i>Aletia insalebosa</i>	クロテンキヨトウ	2 ♂
3634	<i>Aletia nigrilinea</i>	スジグロキヨトウ	2 ♂
3639	<i>Analetia insecuta</i>	アカスジキヨトウ	1 ♂
3772	<i>Hydraecia amuensis</i>	フキヨトウ	1 ♂
3856	<i>Athetis dissimilis</i>	テンウスイロヨトウ	1 ♂
3860	<i>Athetis lineosa</i>	シロモンオビヨトウ	2 ♂
3868	<i>Amphipyra livida</i>	カラスヨトウ	1 ♂
3881	<i>Cosmia affinis</i>	ニレキリガ	3 ♂
4131	<i>Macdunnoughia purissima</i>	ギンモンシロウワバ	1 ♂
4157	<i>Trichoplusia intermixta</i>	キクキンウワバ	3 ♂
4163	<i>Acanthoplusia agnata</i>	ミツモンキンウワバ	1 ♂
4165	<i>Chrysodeixis eriosoma</i>	イチジクキンウワバ	1 ♂
4474	<i>Hypena narratalis</i>	ムラサキミツボシアツバ	1 ♂ 1 ♀
4497	<i>Adrapsa notigera</i>	フジクロアツバ	1 ♂
4453	<i>Hypena amica</i>	クロキシタアツバ	1 ♂
4532	<i>Simplicia niphona</i>	オオアカマエアツバ	1 ♂

(やの たかひろ 〒330 大宮市高鼻町 2-238)

市川さんがミドリシジミにかけた夢

牧林 功

突然に亡くなられた市川和夫さんを偲ぶとき、いろいろな思い出が走馬灯のように駆けめぐる。最初に出会ったのは蛾類学会の例会で、杉さんのお宅がまだ大森にあった頃である。その帰り道、京浜東北線の電車のなかで親しく話した。勧められるままに埼玉蛾類談話会に入会もした。市川さんとのおつき合いは、そこからはじまった。市川さんを語るとき、蛾にまつわる話を書くのが常道なのだろうが、ここではミドリシジミと県の蝶について記す。

市川さんは秋ヶ瀬のミドリシジミについて、格別の思い入れを持っていたようだ。多くの虫好きがそうであるように、市川さんも最初は蝶から入っていった。蝶好きがゼフィルスに特別の肩入れをするように、市川さんもゼフィルスに熱をあげた。残念ながら県内にはメスアカとかアイノなどのフィールドは少なく、かつ遠く、ゼフへの思いはミドリシジミに頼る他なかった。

だが秋ヶ瀬のミドリシジミは、生息基盤のハンノキ林の広大さに保証された大個体群であり、あまり他に誇れる蝶のいない埼玉県にとって、自慢できる存在であった。

ミドリシジミを県の蝶に推すという構想は、埼玉県が行った荒川の総合調査のなかから生まれてきたように思われる。総合調査報告書のなかの座談で永野巖さんは、秋ヶ瀬には遷移段階の異なる色いろなハンノキ林が残されていて、貴重だと話している。それを受けた形で、市川さんはミドリシジミについて触れ、これを埼玉県の蝶に指定したい——そうすれば結果的にハンノキも守れるといっている。このとき市川さんの脳裏には、ミドリシジミが飛び交っていたに違いなく、これを県の蝶に指定すれば、秋ヶ瀬のハンノキ林は残されると即座に判断したと思われる。

その後、市川さんはミドリシジミが県の蝶にふさわしいことを、事あるごとに触れていく。1988年の埼玉昆虫談話会の総会では、私にミドリシジミを「埼玉県の蝶」にする提案者になれといい、県政記者クラブにもそのことを通知する。その原文は以下の通り。

「埼玉県の木はケヤキ、花はサクラソウ、鳥はシラコバトです。昆虫については都道府県で種名を決めた例はないようですが、日本昆虫学会が『国蝶』と決定したオオムラサキがその後国民の間で定着し、保護の機運が高まりました。」

埼玉昆虫談話会は、県立秋ヶ瀬自然公園のハンノキ林と、その葉を食べて育つ蝶のミドリシジミとは、埼玉県が誇ることのできる極めて貴重な自然であると認識し、来る4月3日(日)の総会において、ミドリシジミを「埼玉県の蝶」に指定します。

このことを県民の皆さんにお知らせし、みなさんと共にミドリシジミとそれをとりまく自然環境を大切に見守ってゆきたいと念願しております。」

市川さんは総会の3日後の4月6日、知事公邸に当時の畠和埼玉県知事をたずね、埼玉昆虫談話会が先の総会で、ミドリシジミを『埼玉県の蝶』に指定したことを報告し、併せて県でもミドリシジミを『埼玉県の蝶』に制定することを要望した。この知事訪問には私も誘われたのだが、所用があつて同道できなかつた。

その直後の私信には、この時の状況がかなり詳しいので明らかにしておきたいと思う。

「4月6日は一人で心細く感じましたが、会の活動を少し説明し、大部分はミドリシジミの話を知事さんとして来ました。その時の感触はまあまあでしたが、後で県の自然保護課へ行きましたが、行政の壁は厚いことを感じて帰って来ました。」

知事さんへの要望書、最近の新聞等のコピーを同封しました。うらわ朝日の牧林さんの言葉「浦和のような市街地に飛んでいるのは、すごいことなのです」は素晴らしい表現だと思います。これだと思いました。

読売、毎日、埼玉、サンケイ、NHK・TVが取上げてくれました。私自身は、蝶研出版、月刊むし、昆虫と自然、それに白水隆先生、緒方正美先生、須甲鉄也先生、永野巖先生等に、今日同封したような資料を送り、PR方をお願いしあげました。

県自然保護課からは(県)野鳥の会へ、このことの重要性を問合せて来たそうです。会長はもちろん、副会長のト沢美久先生(植物学)は、ハンノキ林の保護からも、昆虫談話会のミドリシジミ県蝶指定は有意義であると述べたそうです。」

埼玉新聞の記事では、このとき畠知事は「緑や昆虫を守るということは自然を守ること。今後、検討していくよう環境部に指示しておきましょう」と前向きに検討することを約束したとしている。

ミドリシジミを埼玉県の蝶にしようという雰囲気が出来上がったあとの、4月上旬の総会での決議、県政記者クラブでの発表、知事への要望書等の一連の動きはじつに電光石火であった。やはり、できる人の決断と行動は素早い。日ごろの温厚な市川さんとは別の面を見た思いだった。

埼玉県には既に三つのシンボルがあった。木のケヤキ、花のサクラソウ、鳥のシラコバトである。これらは県民投票で決められた経緯がある。

県では三つのシンボルの次に続く、蝶、魚の制定への雰囲気づくりを望まれていたふしがあった。このため談話会では、翌1989年の総会でミドリシジミ委員会を設置し、ニュースレター「ネオゼフィルス」を月刊で出していく。「ミドリシジミを知る集い」や「ミドリシジミを見る集い」も精力的にこなした。

その甲斐があって、県の魚ムサシトミヨと共に、県の蝶ミドリシジミがめでたく誕生した。市川さんはけつして感情をあらわにされることはなかったが、おそらく心の中で快哉を叫んだに違いない。

それからというもの、ミドリシジミは県の五つのシンボルの一つとして、パンフレット、県勢便覧、小学校の教科書など、県の発行物では事あるごとに紹介されることになる。実際のミドリシジミは知らなくとも、言葉の上での定着はできたように思われる。

県の蝶が制定された翌年度、県自然保護課はミドリシジミの森の設置の検討に入り、委員会を設け対処する。

ミドリシジミの森の背景として、埼玉県の平野部の原風景を代表するハンノキ林に生息し、今後の自然保護の取組みの中で、希少な埼玉の原風景を保全していく際の指標として価値が高いことをあげている。

かつては、荒川をはじめとした河川敷にはハンノキ林が形成されていたし、水田地帯には稻をかけるため、畦道や水路沿いにハンノキが植えられていた。これらの場所では、数多くのミドリシジミが生息していたが、都市化の進展が著しい今日、河川敷利用の多様化、水田の減少、ハンノキの稻掛け用としての役割が終わつたこと等から、ミドリシジミの生息場所であるハンノキは急激に減少している。

特に、県東部の低湿地帯では、ハンノキは数少ない自然生の高木林であるため、ハンノキ林の減少は、埼玉の原風景の減少に等しい。

ミドリシジミの森の設定は、その生息場所であるハンノキ林の保全、埼玉県の低湿地の代表的な風景の保全のために必要である。ということで、越谷市の県民健康福祉村、吉見町の八丁湖公園、浦和市の秋ヶ瀬公園、北本市の自然観察公園、羽生市の羽生水郷公園の五箇所をミドリシジミの森の整備地として選定し、順次整備を進めていくことになった。

一方、ここにきて、一般市民の中から素晴らしい動きが出てきた。富士見市立南畠小学校の小川倭さんとその仲間である。大人と子供がいっしょになって自然の素晴らしさ、生命の輝きをうたっていこうという、うたごえサークル「ゼフィルスの森」の誕生である。

このサークルは最初に、ミドリシジミをテーマにした音楽物語「ゼフィルスの森」（脚本・作詞 関山昭子／作曲 柚 梨太郎）を歌う。自然が豊かであることをねがい、人間もその豊かな自然のなかで、心やさしく豊かでありたいとねがう、うたう環境教育を目指すのだという。公演は来年の二月。本当はそれを聴きにいけばよいのだが、ミドリシジミをうたった交響詩ということで、全部で20近くの詩で構成されている一部を紹介したい。

親と子の音楽物語 ゼフィルスの森

関山昭子・詩

「さあ！とべ、とべ」

わたしたちの羽は青緑
そう！わたしたちはミドリシジミ
夏のたそがれのハンノキ林
空はあざやかな群青色
さあ！とべ とべ それは美しく
さあ！とべ とべ それは生き生きと
さあ！とべ とべ それはまたたくまに

わたしたちの羽は青緑
そう！わたしたちはミドリシジミ
森の梢をキラキラとひかり
スクランブル飛翔をくりかえす
さあ！とべ とべ それは美しく
さあ！とべ とべ それは生き生きと
さあ！とべ とべ それはまたたくまに

「ハンノキの小枝に」

ミドリシジミの卵は冬の日もハンノキの小枝にいる。
小さな卵ね！小さな小さな卵！
たくさんの特記がエッチングされている卵
ずい分たくさんの種類があるのよ・・・
ハンノキの枝に、小さな卵をみつけると、立ちどまりしばらく見つめる。

まるで林の宝石だもの・・・
ミドリシジミはハンノキでそだつ

ミドリシジミが県の蝶に制定されたことで、県内5箇所に「ミドリシジミの森」が誕生し、ミドリシジミをテーマにした歌まで歌われることになった。市川さんの視野にそこまで入っていたかどうかわからないが、望まれていたような状況になりつつある。晩年は環境教育にも取り組まれていたから、このような展開を地下で喜ばれているに違いない。

(まきばやし いさお 〒330 大宮市天沼町 2-864)

追悼・市川和夫先生

原 聖樹

◎ 車社会の虫屋

日本に車社会が訪れ、レジャーブームが起こったのは1970年代に入ってからだ。それまで、私たち庶民が自家用車を持つなどということは夢のまた夢であった。

私が大学生だった1960年代前半、学校に自動車部なるもののが存在し、中古車以下のオンボロ外車（今でいうスクラップ車）が校庭に1台置かれていた。いつ見ても、何人かの初年生がこの車を修理していたのだが、修理のための練習車と思っていた本車がたまに走ろうものなら、“動くのだ！”と感心したものである。部費は、当時の貧乏学生には手の届かぬほど高額で、しょせん自動車部は庶民のクラブではなかった。

「アメリカでは家族に1台は自家用車があり、買い物や通勤に使用されている」と聞くと、アメリカ人はとってもリッチな国民に思えてならなかつた。それから10年後の日本に、こうも早く庶民にマイカー（初めは中古車だった）の持てる時代が到来しようとは・・・。信じ難いほど、世の動きは目まぐるしい。

今の時代、採集・調査行に自家用車は欠かせない。私が車を入手して山野を駆ってすでに20数年が経過した。この間、中古車3台・新車2台を乗り継いでいる。ところが、その頃と現在とで車に乗る時間はさほど変わらず、年寄りの仲間入りをしたのだから遠くへ行く回数を減らそう、夜行日帰りなんて疲れる採集行は止めよう・・・というふうにはなってこない。私と同時代の方々もおおかたこんなところであろうし、また若い人達にしたって、いずれはそうなるのである。日本が車社会に突入したとき最初にその恩恵に浴した虫屋（当時は若人）も、今は壮年期を越えた。

実はこれはたいへん恐ろしいことで、いつまでも昔のつもりで車を運転していると、若いのは気持ちだけで、体力が衰えているだけに、注意力も散漫になりがちで、いざという時に反射神経も鈍くなる。交通事故は一瞬の出来事。時間が1秒ずれたら起こりえない。1秒の何分の1かが魔の時間で、そこに巡り合わせの不運も働く。この点、心したいものである。私も、若くはないのだ。休日には往路で、到着地が観光地の場合はここでさらに渋滞し、帰路またしかり。

◎ 出あい

市川先生の存在を知ったのは1950年代後半のこと。私が浦和高校生物部に在籍していた時で、当時クラブの顧問であられた小杉昭光先生から、母校の先輩に2人の虫屋がいる旨うかがつた。市川先生と矢野重明さんである。

市川先生は浦和市立高校の教師で蛾を調べているとのことであった。これは矢野さんから聞いた話であるが、秩父三峰山のケーブル駅でシーズン中毎朝、燈火に飛来した蛾を駅員がホウキでバケツ一杯掃き集めて捨てている事実を知って驚嘆したものである。市川先生も当時、このケーブル駅で頻繁に夜間採集を実施しておられたらしい。矢野さんから“蛾をおやりなさい”などと言われたりした。

矢野さんとは、秩父小鹿野で氏が採られたアサマシジミの標本を見せていただいたことがきっかけで懇意になり、氏から蝶の分布・分類・生態等について実に多くの教えを受けた。同氏によって浦和市美笛で記録されたシリビアシジミの再発見が目的で、下校時に自転車を駆って現地へ急行したことなどが懐かしく想い出される。環境が変化して蝶の姿は見られなかつたが・・・。

高校卒業時（1960年）に、田村公憲君と団つて生物部OB会を創設した。私の学年が最古参ながら、この会は現在も続いている。蝶に狂っていた当時（今は？）の私は、埼玉に虫屋の集まる場が欲しいと、強く願っていた。県内には唯一の昆虫同好会「青葉会」が活躍しており、矢野さんの編集による『Argynnis』が発行されていたが。この会は同氏を筆頭に梶村秀樹・布施英明諸氏ら気の合つた友人の集まりで、私には同人誌的な色彩が強いように思えた。同誌が10巻2号（1961）で廃刊になった頃のことである。

偶然の機会に市川先生と初めてお会いしたのもこの時分、三峰登り口においてであり、それは1960年6月26日のことであったが（本誌No. 7に掲載），この時どんな言葉を交わしたのか記憶にない。当時の私は、田村君や同期後輩の松本孝芳・高木郁夫君らにアセチレン燈を押し付けられて（？），中部山地で蛾の夜間採集を実施したりしていた。

◎ 会の創立

大学2～3年在学時のことだったか、私は全県的な昆虫同好会の設立について矢野さんに相談を持ちかけた。氏は趣旨には賛同されたが、現実面で慎重であられた。事務局をどこに設置するか？ 誰が会の雑務を請け負い、また会誌を編集するのか（ガリ切りのアルバイト）？ さらに資金面での不安も大きかった。矢野さんは「同好会は自然発的に成立するのが理想」と、考えておられたようである。

この件については、私が一方的に矢野さんの下宿先（与野市大戸）や勤務先（埼玉中央病院）に押しかけ

『寄せ蛾記』発刊時における、市川先生からの私信

虫談義に花を咲かせていた折にも、たびたび話題になった。結局、事務局としては市川先生宅が最適であること（したがって、先生を担ぎ出し）、初めから独立した会をスタートさせるのではなく、身近の蛾屋間に連絡の場ができれば・・・ということになり、矢野さんも熱が入ってきた。

矢野さんのご尽力により市川先生と段取りがつき、初の話し合いの場が先生宅で開催される運びとなった。当時、蛾に興味を持つ者として先生にご指導を仰いでいた田村君らも、このような動きには積極的に賛同したらしい。

1963年6月のこと。その日、新婚直後の矢野さん宅（借家）で奥様からごちそうになったインスタントラーメンの美味しかったことが、強く印象に残っている。氏と連れ立って先生宅を訪問した。この席に、並木彬雄氏、松本・高木君や、田村君と同君の東大同級生鳥渴顯雄氏あたりも集まっていたようだが、記憶が定かでない。蛾類学会の談話会が開催されない月に、県内在住の学会員ら小グループの同好者が、ともかく一同に会して情報交換をしたい、ということに話が一致した。始めから独立した会を創設するのではなく、成り行きまかせというわけである。先生は、この集まりを将来蛾類学会の埼玉支部に発展させたい、という意向を抱いておられたようだ。

その後、10回近くの会合が主として先生宅で持たれ、やがて当会の前進である「埼玉蛾類談話会」が誕生し、先生の手で会誌『寄せ蛾記』の創刊号が1965年6月1日付で発刊された。当時の会員は11名で、うち9名が浦高の同窓である。同窓会的な感じを与えたかもしれないが、これは期せずしてそうなったにすぎない。広く県内外を問わず、また会員を蛾屋に限定せず、将来の「埼玉昆虫同好会」を夢見てのスタートであった。

◎ 『埼玉県動物誌』の想い出

私は1965年に神奈川県に就職し、社会人に変身した。その後10年位は、帰省の帰路に当会の例会に数多く出席し、多くの方々と知り合いになれた。この間、私は蛾屋を廃業し、矢野さんも氏の送別会を兼ねた第15回談話会を最後に岡山県新見市へ転勤された。やがて、田村・松本・高木君らもそれぞれ職務が多忙となり、虫から遠ざかっていました・・・。私が何人かの知人に当会への入会を勧誘したのもこの頃のことであった。

市川先生とは、虫や会のこと、情報・資料交換等で手紙のやり取りが続いている。

埼玉県教育委員会で『埼玉県動物誌』（1978）を刊行することになった際、基礎となる現地調査が終りに近づきつつある段階で、「埼玉県の蝶類」の作成に協力して欲しい旨、先生から連絡をいただいた。「蝶は苦手なので（？）手伝ってくれ！」・・・とのこと。私は主に文献調査を担当し、また奥武藏・秩父方面へ2回ほど単身蝶の分布調査に出向いたにすぎない。この件で、複数回、先生宅を訪れ、資料の検討やとりまとめ方法などについて相談したことが貴重な想い出になった。

◎ 新年会のことなど

いつ頃から始まったのか覚えていないが（たぶん十数年前），1月2日に市川先生宅で新年会が開催されるようになり、私も毎回出席させていただいた。メンバーは他に巣瀬司・碓井徹・本多健一郎・松本和馬の諸氏で、いずれも当会会員ながら、浦高生物部OBの私的な親睦会である。

先生が若返り（？）と情報交換などを目的として呼びかけたものらしい。そして、先生はこの集まりを毎年楽しみにしておられたようであるが、私達はご家族の方々に大変お世話になった。顔合わせ的な虫談の集いであるが、情報交換の場として楽しく、かつ有意義なものであった。

2～3年前の新年会の時であったろうか。先生は夏の北海道へ行って来られたとかで、私もリタイアしたら、一緒にさせて欲しい旨申し出ると、「ぜひ、一緒にしましょう！」とのことであった。私は北海道の体験がない（職業柄、夏場は無理）。その日の到来を夢に描いていたものだが、10年先の先生にその気力がありだろうか・・・？と、余計な心配をしたりした。それも今は虚しい。

市川先生は、最初に出会ったときから屈託のないお人柄で、心温かな人であられた。几帳面で誠実な方である。また、不必要と思われるほど遠慮深い態度を示されたことが幾度かあった。

先生は、長年にわたり当会の継続・発展と会員の親睦・融和にご尽力され、これを市民的な存在に高めた。県市町主催の昆虫調査あるいはミドリシジミの県蝶指定など、当会へのパイプ役として果たされた功績は忘れ難い。言うまでもなく、先生は埼玉虫界最大の功労者である。先生が個人的に最も執念を燃したテーマは何だったのだろうか？埼玉県蛾相の解明だったのではないかと、私にはそう思える。語るは易いことながら、これは個人が生涯かけて挑んでも達成困難な大事業であろう。当会30周年記念の“埼玉県昆虫誌”的完成が、先生のご遺志に報いることになる。まだこれからもという時に、突然の死が悔やまれてならない。先生のご冥福とご家族の方々のご健勝とご多幸をお祈りするばかりである。

昨年9月18日、私は相模原の雑木林でホタルガの乱舞を眺めていた。今もって信じ難い出来事であるが、生前の先生に出会えたことに感謝しつつ筆を置かせていただく。合掌・・・・。

市川先生の思い出

内田 正吉

いつだったか、9月の下旬のある夜、市川先生から電話があった。「クワゴの写真を撮りたいんだけど、内田君ちではカイコを飼っているから、桑に混じっていないだろうか。明日ちょうど寄居方面に行く予定があるので、写真を撮りに寄らせてもらえたならありがたいんだけど」という内容だった。ちょうどその日は、自宅の晩秋蚕という蚕期のおこあげ（上蔟）作業のため、休暇をとって作業の手伝いをしていた。その際にクワ畠から採ってきたクワの葉につかまっているクワゴが何頭も見られたので、即座に「いいですよ。今日も作業中に何頭もクワゴがいましたから」と返事した。

翌朝、起きるなりさっそく自宅の蚕室周辺でクワゴを捜しました。ところがどうだろう。不思議なことに、クワゴは1頭も見られないのだ。昨日はあんなにいたのに。出勤までの時間いっぱい捜してみたが、ついに1頭のクワゴも見つけられなかった。しょうがないから、親に頼んでおいて自分は出勤した。

夕方自宅に帰るなり、どうだったのか両親に聞いた。「市川先生が見えるまでに、やっと1頭クワゴが見つかったよ。先生は腹這いになつてクワゴの写真を撮つてたよ。『腹這いじやあ服が汚れるから、下に新聞でも敷きますよ。これを使ってください』って言ったんだけど、先生は『いいんですよ。いつもこういう風にして撮つてるんですから』って言ってね。それから、族（まぶし）の写真なんかも撮つてたよ。感じのいい人だいね」と言うことであった。クワゴが1頭も見つからなかつたらどうしようと心配していたが、ほっと安心した。

以後、うちで市川先生の話が出ると、いつもこの時のことが話題になった。なお、日高町史に載っているクワゴや養蚕作業の写真は、このときに市川先生が撮られたものである。

1993年9月18日。その日は、市川先生はいくらか疲れ気味のようであった。小川町の動物調査のための打合せが終わり、引き続いての笠山での夜間調査であった。まだ明るい時間に幕を張り、町史編さん室で用意していただいた弁当を食べ、ぼくは辺りの直翅類を調査していた。そうこうするうちに、あたりはだんだんと薄暗くなってきて、それと同時にはるか見下ろす小川の町並みのあたりが、ひとつふたつと点灯される。ガちらほらと幕に飛んでくるようになった。ヒメクサキリやカンタンなども近くの草むらで鳴き始める。完全に暗くなると、小川の夜景がくっきりと浮かび上がった。空気が澄んでいるためか、熊谷などの高崎線沿線の夜景も見える。ときどき、そのきらめく幻のような夜景を眺めた。いつもなら発電機の音でうるさいはずの夜間調査だが、いまから思うとその夜はなぜか静かな夜であった。ぼくもガを探る手伝いをしたり、直翅類を探つたりしていた。「これがライトに来たんだけど、とっておく？」と、差し出されたコカマキリが、市川先生から戴いた最後の標本となった。

夜10時過ぎであろうか、ライトや幕を片付けて、解散となつた。それぞれの車に乗つて、それぞれの帰路に向かつた。1番目に編さん室の車が走り、2番目が市川先生の車であった。ぼくは3番目で、市川先生の後を走つた。カーブが続く山道を、なぜか市川先生は急いでいるように見えた。栗山の集落を通り過ぎて山を降り、小川の町に出たのが10時30分ころであったろうか。ぼくは途中の交差点で寄居方面に左折し、市川先生はそのまままっすぐ浦和へと向かわれた。その左折するときに見えた暗闇のなかの市川先生の車の2つの真っ赤なテールランプが、いつまでもぼくの脳裏に残つてゐる。それが最後の別れになつたとは、ぼくはいまだに信じられない。

市川先生、短い間でしたがいろいろお世話をになりました。

(うちだ まさよし 〒369-12 大里郡寄居町大字桜沢 1505)

市川先生との出会い

吉田 文作

昨年9月19日、会員の竹内さんから電話があり、市川先生が交通事故で亡くなられたとの訃報がありました。この瞬間に頭の中は真っ白になり世の中の時が一瞬止まったような気がしました。そしてその夜は、事故で亡くなられた事実と、そんな事は無いと信じる葛藤でほとんど眠れませんでした。しかし時が経つにつれて事実のほうが先行するようになっていきました。あれ程元気だった市川先生がと思うと今でも信じ切れません。ひょっこり私たちの目の前に姿を見せるように思えてならないのです。

私が市川先生と知り合ったのは今から15年程前に溯ります。当時寄居町では、丸橋町長のもと、寄居町史を編纂する事になり、私も調査協力員ということで、寄居町から依頼を受けました。担当は鱗翅類（チョウ・ガ）で、資料の整理や収集を始めました。私は寄居町に生まれ、小学校の頃からチョウの収集をやっていたから、チョウに関しての資料はかなりそろっておりました。しかしガに関しては興味がありませんでしたので、資料がほとんどありません。そこでまず、ガの採集から始めねばなりません。何度も夜間採集を続け、たくさんのガを採集し、標本にしましたが、いかんせん名前が分かりません。大きなスズメガやヤママユなどは分かりますが、シャクガや小さなガになると全くお手上げの状態でした。

そんな時、埼玉県内ではガの研究に関しては第一人者である市川先生に同定をお願いしみたらと言う事になりました。お願いしてみたらと言っても正直なところ困りました。いったい市川先生はどんな人なのか全く知りません。名前は有名だったから聞いたことはありました、会ったことはありません。それでも思い切って電話をしてみました。市川先生は当時、浦和高校の教諭をしておりましたので、高校に電話をしたのですが、とても親切な声でガの同定を快く引き受けってくれました。あまりの親切さにあっけに取られると同時に内心ホッとしました。標本を持って来れば同定してくれますよとの事だったので、数日後、標本箱を浦和高校に持参し初めてお会いしました。

正直なところ少し不安でしたが、会って見ると電話のとおり親切で穏やかな人なので、安心して色々な事を聞く事が出来ました。先生はよく虫の事をしています。私も虫は好きでかなり知っているつもりでおりましたが、とても足元にも及びません。次から次へと新しい事を教えていただいて、わずか1時間程度の時間が1ヶ月いやもっと長い時間に感じられました。

虫の話をしているうちに、県内には虫好きの人の集まりである“埼玉昆虫談話会”というのがあるので、入会してみないかとの誘いがあり入会することにしました。翌日早速入会手続きをとって”埼玉昆虫談話会”的会員となり、その後先生とのお付き合いをさせていただく事になった訳であります。

その後こんな事がありました。昆虫雑誌“昆虫と自然”がアサマシジミの特集号を出す事になり、埼玉のアサマシジミという題で、市川先生が原稿を依頼されたとの事でした。夜電話があり、吉田さんは美の山（蓑山）のアサマシジミの発見者でもあり、詳しいと思うので原稿を書いてもらえないのかとの事でした。確かにアサマシジミには興味を持っていて、データーもいろいろ有りましたが、市川先生を前にまだとても書けるような状況ではありませんでした。

そこで私の知り得る範囲の資料を提供し、市川先生に書いてもらう事になりました。後に“昆虫と自然”を送っていただいたので記事を読んで感激しました。と言うのは資料の提供者を尊重し各所に資料を紹介し、本当に先生の心配りが感じられたからです。本当に先生は他人を思いやる心のあたたかい人でした。今でも他の人にたのまれて資料を提供した事が何度かありますが、こんなに親切にされたのは初めてで、とても爽やかでした。思い起せばこの他にも宿泊談話会・展示会・熊谷での総会など色々な思い出が走馬灯のように駆け巡っています。

私もこの世に生を受け、はや46年が経過し、その間に様々な人の出合いや邂逅がありました。こんなに親切で、人の気持ちが分かる人に出会った事はありません。養護教員養成所で親切に教えてもらったことの話も、女房の友達から何度も聞きました。

あれだけ新聞やテレビに出て、昆虫界を先導する活躍をした先生なのに新聞の片隅に小さく載っただけの交通事故の記事はあまりにも寂しすぎます。ただ平成5年11月14日付読売新聞の大塚記者の書いた“知人の交通事故死に思う”は唯一の救いでありました。

ハンノキ林を守るため、ミドリシジミを県の蝶に指定するなどの努力をされた事でも分かるように、先生は郷土の自然を深く愛し、一番“緑”を大切に考える人でした。“緑”が無ければ、人間も虫も生きていけないからです。ぜひともこの意志は受け継いでゆかねばと思っております。市川先生の冥福を心よりお祈りし、思いでの記としたいと思います。

み飛はしまつが、ある日、そこに知人の名前があつたとしたら――。
九月二十日のことであ

ポケツトベル

新聞の下の方に小さく
載つてある交通事故の記
事。ふだんは何気なく読

る。いつも通りに新聞を

た。そこで我が『を題した昨年八月のと、市川
広げ、そして『を題した昨年八月のと、市川
った。ガヤチョウの研究さんは、展示されたチョウ
家で、戸田市立郷土博物について分かりやすく
館の嘱託員を務めていた説明してくれた。それか

知人の事故死に思う

市川和夫さん（当時六十歳）が、交通事故で亡くなつたという記事を見つけたからだ。市川さんとの出会いは、同博物館で開催中の写真や、チョウの話を聞いた。今でも時折、応接間に飾つてあった娘さんの市川さんの交通事故も、署管内の吉見町だった。

らず、当事者たちを十分に配慮した記事を書きた
いと思う。

る時の市川さんの輝いた
目を思い出す。
“取材範囲”の東松山市
周辺で最近、交通事故が
多発している。東松山署
管内の交通死者数は今年
に入つて二十三人で、県
内三十七署のワースト2
位を占めている。この事
故の記事の裏には、悲し
み苦しむ人たちが大勢い
る。わざか一年ほどのつき
あいの私でも大きなショ
ックを受けた事故だった
が、家族や親類の方の悲
しみは計り知れない。何
気なく読んでいる死「事
件」の裏には、悲しみ苦し
む人たちが大勢いる。

100

讀者新聞 1993-11-14

(よしだ ぶんさく 〒360 熊谷市大字三ヶ尻 2849-1)

市川さんのこと

小田 博

その日(1985年8月24日)の夕方、「やあ、痛えなあ、スズメバチに刺されたよ。」と、額のあたりを押されてちょっと顔をしかめながら、それでも事もなげに市川さんは言い放った。幸い大事には至らなかったものの、ショック死などということもあるから、居合わせたわたしたちは一様に驚き心配した。ハチは現場におられた南部さんによってキイロスズメバチと鑑定された。前夜金曜セミナーの席上で採集のお誘いを受け、南浦和駅から市川さんの車に同乗させてもらい、川又にある東大秩父演習林の学生寮を訪れていたのである。寮の二階の羽目板に大きな半円形の巣があって、ハチが盛んに出入りしていた。そのまま向かいの一軒家がわたしたちの拠点で、そこから車道へ行くには巣の下を通ることになるが、臆病者のわたしなどは極力用心し遠回りさえしていた。市川さんとて巣の存在に気づかぬはずはないが、いささか油断されたのであろう。痛みはその後七時間ほど消えなかつたそうである。わたしなら採集する気力などとうに失せて、痛みがひくまで横臥していたにちがいない。しかし、市川さんは時を移さず寮の物干し場にライトトラップを設置する準備に取りかかったのだから恐れ入る。

採集は白布に止まっていた何頭かのスズメバチ退治から始まった。にくくき敵とばかりハチどもはつぎつぎ大型毒びんに放り込まれた。この日は晴天で霧も発生せず、蛾などはさほど収穫はなかったようだが、甲虫はけっこうおもしろいものが採れ、その成果にじゅうぶん満足することができた。非夜行性のわたしは先にやすませてもらうことにしたが、遅くまで市川さんは採集品の整理に余念ないという風であった。これは展翅するもの、これは永久に紙包みのままというぐあいに、大小の蛾を丹念に三角紙に入れ分類しておられた。翌朝市川さんから滝川林道で夜間採集をするけれど、ひとりでは心細いからどうかと言われた。わたしは兵糧が尽きたとかなんとかあまり理由にならない言い訳をして辞退し、川又を後にした。《採集道》というようなものがあるとすれば、市川さんはさしづめその極致をゆく先達のお一人であろうとはかねてからの思いであったが、このスズメバチの一件よって市川さんの採集魂にますます畏敬の念を強くした。

市川さんが退職後戸田市立郷土博物館の嘱託になられたことを耳にしていたので、妻と博物館を見学がてらお訪ねしたことがある。亡くなる一ヵ月とすこし前のことである。研究室はさして広くはないけれど、壁にはご自身で撮影された蝶の生態写真が何枚か飾られ、机には灯火で得たと思われるコガネムシ類などが展足板に並べられていて、いかにも市川さんにふさわしい仕事場とお見受けした。市川さんは例の新式の乾燥器で作製したという大きなイモムシや陸ガメやゲンゴロウの標本を手に取って見せてください、実際に楽しそうな笑顔で近況をわたしたちに話されたものである。それからまもなく博物館で行われた同定会で、市川さんから大型ハネカクシを数頭託された。交尾器を取り出すなどして種名がわかり、そろそろ博物館に標本をお持ちしようかという矢先、市川さんは急逝されてしまった。思うに、市川さんは虫屋としてもこのうえない理想的な余生を歩み出されたばかりのはずであった。市川さんのあまりに唐突な死は、いかに運命のいたずらとはいえ、なんと不条理なことか、いまだ痛惜の念を抑えることができないでいる。末尾に市川さんの採集されたハネカクシを記録し、ご冥福を心からお祈り申し上げる次第である(標本は戸田市立郷土博物館に保管)。

1. ウスアカバホソハネカクシ *Othius medius* SHARP

戸田市道満(調節池:屋敷林跡), 1♂, 28.x.1992 [市川和夫採集].

2. ヘリアカバコガシラハネカクシ *Philonthus solidus* SHARP

戸田市道満(調節池:屋敷林跡), 4♂ 2♀, 24.vii.1992 [市川和夫採集].

融通無礙の達人

竹内 崇夫

いつだったか、談話会恒例の忘年会に遅れ気味でかけつけていた時の事だった。大宮駅を出て、年の瀬に賑わう通りを渡ろうとした時、たいそう辛そうな面持ちで市川さんがこちらへ向かってきた。「アレ？ 市川さん、忘年会は今晚ですよね？」 辛そのまま驚いて市川さん、「ア！ 竹内さん、…ええ、今まで忘年会にててたんですよ、…頭が痛くて…割れる程痛いんですよ…今日は帰ります。」と、いかにも耐えられない程嬉しそうな顔になって、「女のひとがとっても綺麗でしたよ……」と目に浮かぶように語りはじめた。

そして、もとの辛そうな面持ちに戻って、「それじゃ、失礼します楽しんできてください。」と立ち去った。

市川さんとの思い出の中で、このシーンは極めて強烈に、しかも象徴的に脳裏に焼き付いている。

市川さんは、ご自分の状況がどうであれ、相対する人を理解し認め、その人にとってベストの対応をされた方だったのでないか。そのためには、世間の常識とかしきたりにとらわれず、『分別』を無くして新しい『分別』を実に、融通無碍に組み立てられる達人だったのではないか。それが生来のものなのか、昆虫や自然界の観察を通して達った領域なのか、突然のご他界に確かめるすべはない。

少なくとも、こんな時市川さんはどう対応していたのだろうかとか、市川さんの思い出の数々が私の人生教科書になっている。

ありがとうございました、市川さん。ご冥福をお祈りいたします。

(たけうち たかお 〒330 大宮市先丸ヶ崎 10-17)

市川和夫先生の突然の死を悼む

野沢 雅美

去る9月19日の日曜日、妻から浦和の市川先生が亡くなられた旨の電話を出先で受け、驚きの余り声を失いました。まさか。それも交通事故による原因と聞き、なんとも残念なりません。埼玉県の動物界になってきた市川先生と接した多くの人たちも同じ気持ちだと思います。私は、教員になった昭和48年頃から今日までお付き合いをさせていただき、数多くのご指導を受けてきました。埼玉県動物誌編集委員会のメンバーとしてお会いしたのが最初だったと思います。以来、調査を通じて昆虫談義に花を咲かせてきました。編集委員の中で私が最も年が若いこともあって、かわいがってもらつたものでした。「埼玉県動物誌」は当時、全国でもこのような調査は珍しく、大きな評価を受けたと聴いています。綿密な企画と実行力、さらになんといつてもものごしの穏やかな人柄で、この大事業を敢行したのは市川先生の力によるものでした。私的なことですが、動物誌の調査をしている頃、先生に結婚するので式の司会をして頂けるか恐る恐る聴いたところ、一つ返事で承諾していただき、いろいろ相談にのってもらったことは、先生との忘れられない想い出です。

先生が主宰した埼玉昆虫談話会がまだ埼玉蛾類談話会だった頃、半翅類の記事を書いて欲しいと入会を勧められ、入会したのが昭和50年頃だと記憶していますが、この頃は先生の手書きによる印刷で、やがてタイプライターを購入され、ますます充実した活動を展開し、日本に数多くある昆虫同好会の中でも、屈指の会に発展させたことは多くの人が知るところです。

退職されて戸田市の博物館に勤務されてからは、一段と研究に精力的に取り組まれていた様子で、調査の行き帰りには、よく長瀬に立ち寄っていました。戸田の博物館の仕事もいろいろアイデアを出して、イベントに力を入れており、今年の夏休みの特別展での資料の借り入れに、自然史博物館に足を運んだばかりでした。

県内各市町村の調査が相次ぎ、いつも一緒に調査の仕事をさせて頂いたのですが、特に私が依頼を受けた、児玉町や神泉村の仕事でも快く鱗翅類の担当を引き受けて下さり、その児玉町史もまもなく刊行される予定

です。広報こだま10月号には児玉の自然（動物編）のコーナーに先生に依頼した児玉の鱗翅類が掲載される予定になっていますが、あるいはこれが先生の最後の執筆だったかも知れません。原稿依頼したのもついこの間で、本当に信じられません。

まだ63才、これからさらに蛾の道を極めようと計画していたと思います。本当に悔やまれてなりませんが、先生の意志を継いで歩む人達の一人としていつまでも先生の事を忘れずに虫を愛し、自然と接していくたいと考えています。そして、先生からの天国の昆虫の採集記録を「寄せ蛾記」で見るのを待っています。

どうぞ安らかに眠って下さい。

1993年10月 記

(のざわ まさみ 〒369-12 寄居町桜沢 2506-4)

市川先生の思い出

萩原 昇

私が、市川先生に始めてお会いしたのは15年前になります。その時は、水生昆虫を研究している大熊先生に誘われて、金曜セミナーに初めて参加した時だったと思います。その時は、特に強い印象はなかったのですが、温厚な人柄の先生だったという記憶が残りました。

二度目にお会いしたのは、久喜市の市史編纂の調査で採集した蛾を金曜セミナーに持っていた時でした。市川先生はその標本を見て、「これは珍しい蛾ですね。良く取りましたね。」「これは多分、埼玉県での初記録ですよ。」とひとつひとつ丁寧に解説をしてくれました。その時の「埼玉県での初記録ですよ。」の一言が強い印象に残り、ずるずると深みにはまりこみ、現在にいたったような気がします。

その後、採集した蛾の同定を市川先生にお願いする機会が多くなり、公私ともに大変にお世話になる事となりました。

の中でも、県立北教育センターの動物現地研修会を平成元年度から4年度まで、お手伝いした時のこと強く思い出に残っています。

その研修会で、市川先生が常に口癖のように話していたことは、「自然から学ぶ」と言う事でした。次にあげた文章は、その時の資料の一節です。

私たちの科学は、自然の事象を注意深く見つめることから発達した。子供たちに、科学の成果として得た知識を授けることや科学の方法を身に付けさせることも、やはり実際の自然を対象にしなければ成り立たないものである。自然観察は、「自然をどうみるか」という観察の仕方を経験として学ぶと同時に、それらの活動を通して「自然から学ぶこと」のできる学習なのである。「自然を観察する目」が育つことは、人の心を豊かにしていく。「豊かな人間性」を求める教育が志向されている今日、直接自然に触れ合う学習は、そのために重要な役割を担うことになる。

また、研修会の指導をするにあたって、きめ細かな準備をされる先生で、必ず下見をするだけでなく、前日には、博物館の近くの「勉強屋」という旅館に宿泊して、ペートトラップを仕掛けたり、灯火採集で研修に必要な昆虫を準備しました。その他、周囲の人々にきめ細かな気配りをされる先生で、下見の時には「これが秩父の名物だから」といって、饅頭を買ってこられたり、「土産には、この店で茸を買うといい」と言って、店を案内してくれたりしました。

市川先生の教育理念「自然から学ぶ」……自然の中にいるだけで、多くの経験を積むことになり、能動的・受動的の両面から自然観が培われ、心豊かな人間が形成される。

わたしは、教育に携わるものとして、この教育理念をさらに広めたいと考えております。

(はぎわら のぼる 〒344 春日部市梅田 614-1)

市川先生の思い出

森中定治・香織

名前はもう忘ってしまったが、私が初めて玉昆に参加したのは、大宮の駅を出て左へまっすぐにどこまでも行き、ガード（線路）を左へ折れた喫茶店の二階であった。その時、市川先生と知り合いになった。それから暫くして、東京在住の人から熱帶性シロチョウの食樹だといってギョボクを頂いた。その人はギョボクをやる代わりに『ハカラメ』と言う植物を調べて欲しいということだった。チョウの食樹として考えている様である。私は安請け合いしたものどうしても分からず、たまたまいた市川先生に聞いてみた。先生は2カ月の間一所懸命に調べてくださり、ハカラメとは『葉から芽』の意味であり、セイロンが原産でインド、太平洋にもあり、別の種がアメリカにもあると言う事まで調べられ、実物まで手に入れて下さった。そして、その名のとおり、葉を植木鉢の土の上に置いておいたら、根が出、芽が出てちゃんと植物が育ってきた。ものすごく丁寧で親切、それでいて親切の押し付けや、ずうずうしいところは少しも感じさせない希有の人だった。身近な昆虫の調査が主だったが、東南アジアにも強い関心をもたれ、マレーシアやインドネシアの話を私にはよくしてくれた。今は利用していないが、パリのマタハリロッジの所有者の鈴木さんを紹介してくれたのも、市川先生であった。長女の誠子が生まれたばかりの頃で、玉昆の採集会、宿泊談話会などにも、何度も家族全員を車に乗せてくれた。人のことに本当に親身になってくれる、実のある人だった。冥福を祈る。

(もりなか さだはる・かおり 〒333 川口市戸塚鋸町 11-20)

浦和市南部領辻の オオウラギンスジヒヨウモンとミドリヒヨウモン

巣瀬司

1993年6月28日の夜、私は当日見沼たんばで採集したミドリヒヨウモン、そして同じ見沼たんばで6月26日に採集したオオウラギンスジヒヨウモンの話を誰かに聞いてほしくて、市川先生に電話をしました。秋に見られるこれらのヒヨウモンチョウは、恐らく山地から移動してきた個体であり、その記録にはそれなりの価値はありますが、こうした初夏の記録は、これらのヒヨウモンチョウがその場所で発生したことを物語つており、秋の記録とはその価値に格段の差があるのです。

見沼たんばは広い緑地ですが、蝶相から見る限り、つまらない場所と言わざるをえません。確かに私は1993年の春までの時点では、7年間の間に見沼たんばで46種の蝶を確認していますが、注目に値する種はほとんどいませんでした。ただ、蝶相はつまらないものの、毎年2月に行われる休耕田の野焼きと、年2回、6月と8月に行われる見沼代用水や芝川の土手の草刈りは気に入っています（巣瀬, 1990: イングレッタ No.8）。そうした従来通りの人為的營力は人里の生き物にとって必要なことだと確信していたからです。実は、そのことがスミレ類を食草とするオオウラギンスジヒヨウモンとミドリヒヨウモンの発生によって、裏付けられたのです。

市川先生は「その2種の記録は寄せ蛾記に載せて下さい」と言われました。すでにイングレッタ（シラサギ記念自然史博物館）No.15に載せた記録ですが、ここに先生との御約束通り、その採集記録を再記させていただきます。

オオウラギンスジヒヨウモン 浦和市南部領辻1♂ (新鮮) 26.VI.1993 巣瀬司採集
ミドリヒヨウモン 浦和市南部領辻1♀ (新鮮) 28.VI.1993 巣瀬司採集

なお、標本はシラサギ記念自然史博物館に所蔵しております。

(すのせ つかさ 〒337 浦和市寺山 806-1)

市川さんの思い出

齊藤 洋一

テレビ番組『ファイト』放映終了の後、碓井さんから電話を頂いた。

『ファイト』にまつわる面白い裏話が聞けるのかなと思い、期待しながら耳を傾けていると、やや沈黙の後、重い口調で「実は・・・・市川先生が亡くなられました。交通事故で即死にちかい状態のことでした。・・・・」と、まったく思いもかけない言葉が飛び出した。私は、突然のこと何をどう考えていいのか一瞬判らなくなってしまった。4月13日の『小野寺さんの「蝶日記」を讀える集い』でお元気な姿を身近に見て、楽しく会話を交わしていただけに、信じられない、信じたくない話だった。

悲しみの中、翌日の通夜に列席させて頂きました。教育関係者のあまりの長蛇の列に、たまげるとともに、市川さんの並はずれた人望の深さを改めて知る思いがしました。

市川さんとの初対面は、10数年前のタカオゼミの席上でした。以来、直接お目にかかったのは数年に一度の虫仲間の出版記念会や、昆虫談話会の忘年会、鱗翅学会の自然保護セミナー等数えるほどでしたが、いつも目を細くして、にこやかに話をされる姿がとても印象的でした。七年前に義父を亡くし年末に喪中のハガキを出した処、しばらくしてからお手紙を頂きました。「ハガキ受け取りました。お悲しみのことと思いますが、力を落とさないで頑張ってください。」といった旨の文面を見て、何と心の優しい方なんだろうと感じ入ったことを覚えています。

埼玉昆虫談話会に入会するずっと以前、『寄せ蛾記』の初期のバックナンバーの入手をさせて頂いたり、数年前『埼玉県動物誌仮目録』を借本コピーさせて頂いたりと、貴重文献の入手でも数度に亘りお世話になりました。思い起こすと、お世話になったことばかりで、直接恩返しをする機会を永遠に失ってしまったことが、とても残念ですが、今後は会誌等に積極的に投稿することで、間接的な恩返しをしたいと考えています。

きっと、今ごろ市川さんは、あの世の闇の中で、心の灯をともしながら、夢中で蛾の採集に邁進しているのではないか、そんな風に感じられてなりません。

市川さん さようなら

合掌

(さいとう よういち 〒132 東京都江戸川区平井 5-26-12)

市川先生と私

渡邊 光行

先生については、短い間しか接する事のできなかった私が、追悼文を書くべきか迷う所でしたが、長い間の深い思い出のある人たちとは別に、先生にとっては部外者かも知れない私として、短くとも楽しい思い出として残っている、記録と残像を短い文にしてみました。

会うたびに、泉谷しげる風な顔立ちで、ちょっと声高な短く間を置いて、話を続けたそうにしてゆく会話は、今でも金曜セミナーで聞こえて来そうな気がします。

先生には、さほど気にする相手ではなかったと思いますが、よく私のことを覚えていてくれて、感嘆語風な、おされた言葉をかけていただきました。私も饒舌ではないほうなので、あわてて支離滅裂な返答をしていた様です。

会社の仕事がコンピューのオペレーターになった頃、時間ができたので1990年位に自然保護団体にかなりの数で入会しました。先生はそれ以前から入づてに聞いたり、図書館の「図書館だより」等で知ってはいましたが、兄が栃木県の方で先生とは別の野鳥の会でかなりの活動をしていたので、なにか間があいていた感じでした。今、思えば先生にとっては活動団体や会の運営方針などは、あまり考へてはいなかつたのではないかと思います。自然と先生とのつながりをより多くの人に、より多くの手段にて知らせたかったのだと思います。

1991年の夏休みに「埼玉昆虫の世界ーファーブルの夏休み」という企画があり、そのおり、写真等で見ていた先生を間直に見たのが初めだったと思います。その後は談話会に入会しましたので、金曜セミナー等でお会いする機会がふえたわけです。

先生は当時、N A C S - J (自然観察指導員埼玉連絡会) の運営委員もしておりまして、1991年8月に三峰にて昆虫の観察会を一泊二日にて行いました。当日は2・3のお誘いが有ったとのことでしたが、20名位の参加者にて新月の良い日に行って頂きました。自然観察指導員埼玉連絡会としてはこの会が先生の最後の観察会でした。若干、私なりの解釈が混じってはいるとは思いますが、明確にはどこがどうとは思い出せませんので、私の当時のメモをそのまま転記しておきます。

タイムテーブル (一泊二日)

1日目

- 09:00 大きい・面白い虫を良く見せる
- 10:00 きれいなチョウを良く見せる
- 11:00 チョウがよく動きだす
- 16:00 ベートトラップ (BAIT TRAP えさ入り落とし穴) を仕掛ける
挽き肉・魚・バナナ・パイナップル (完熟品) ・糖蜜・乳酸飲料・さなぎ粉 (14日間で挽き肉は溶ける7~9日位中~大シデムシ)
市川式 カルビス+さなぎ粉 虫が臭くならない (翌日でもオサムシが落ちている~3日)
果汁 (ジュース) トラップを仕掛けたクヌギ・クリ・コナラヘイチゴやリンゴの汁をぶどう酒でといったものを幹へたっぷり塗る モモ・糖蜜・スイカの皮
市川式 黒砂糖10+酒 (天然醸造) 1+酢 (天然醸造) 1~2的をタオルにしたして適当な木へ
液は煮詰めても良い
酒はビール・日本酒・焼酎・泡盛・ウイスキー
- 19:00 採集した虫の展翅・展足
大型図鑑で名前を調べる
自作の簡易展翅デコレーション運送箱での展翅とラベルの貼付
観察記録をつける
- 20:00 燃火観察 (新月の日が良い)
紫外線燈 (ブラックライト) 日焼け・目に良くない
誘蛾燈 (安定器付きも良い)
蛾が入らないように首にタオルを巻く
- 21:00 果汁トラップの観察 (ガ・キリギリス科)

2日目

- 05:00 果汁トラップの観察 (たそがれ性甲虫) (夜行性動物が戻る)
- 09:00 ベートトラップの観察

2日間の記録

1991.08.10~11 民宿みつみね

モンキアゲハ・オナガアゲハ・カラスアゲハ・キアゲハ・スジグロシロチョウ・キチョウ・ベニシジミ・コミスジ・イチモンジチョウ・ルリタテハ・アカタテハ・クジャクチョウ・キマダラヒカゲ・ダイミヨウセセリ・ウスギヌノメイガ・オオミズアオ・アゲハモドキ・ウンモンズズメ・イカリモンガ・キドクガ・コガネムシ・ヒメコガネ・ミヤマクワガタ・ハナカミキリ・ウスバカミキリ・アシナガゾウムシ・オオゾウムシ・アオオサムシ・クロナガオサムシ・オオオサムシ・オオゴミムシ・ヨツボシモンシデムシ・キイロゲンセイ・コメツキ・アオカミキリモドキ・ミヤマフキバッタ・キリギリス・ウマオイ・ツユムシ・トビナナフシ・シオカラトンボ・アカネトンボ・ヘビトンボ・カマキリモドキ・ウスバカゲロウ・シロオビアワフキ・オオヘリカメムシ・キイロスズメバチ・クロマルハナバチ・トラマルハナバチ

モンキアゲハについては私が採集したものを、三峰でもみられるようになったとの解説を先生にしていただきました。燃火観察でも先生は専門の蛾で2・3種の珍しい蛾を採集しておられました。とにかく、先生はイカリモンガ・トビナナフシ・オオヘリカメムシと次から次へと解説をしながら大型の毒ビンへ昆虫を投入してゆきます。一応『自然観察会』なのですが先生はまったくちゅうちょしませんでした。展翅についても、いつも持ち歩いていただろう、自作の蛾用の溝の大きい展翅板にたて続けに展翅を続け、見ている人には蛾の美しさを語られておられました。ミニチュア模型用の大型のルーペをして、昆虫について話している姿は、見る人には迫力のある時間でした。寄せ蛾記へはついつい投稿しそびれてはいましたが、今回、標

本はありませんが、モンキアゲハ等を天国の先生を証人として投稿した事にしたいと思います。

最後に当時、県の蝶の決定の応募時期でもあったので、先生は『ミドリシジミ』と応募用紙に記入していくだけようお願いした上で用紙を全員に配り、全員がそのむね提出しましたおり、応募用紙を手にして「ありがとうございます」とほんとうに喜ばしそうな声と顔をしていらしたのを昨日のようにおぼえています。

(わたなべ みつゆき 〒336 浦和市瀬ヶ崎 2-14-8-105)

先生からの贈物

樋田 光

私の標本箱にひとつのラベルのついたクロツバメシジミの標本がある。そして、そのラベルの採集者名欄にはby ICHIKAWAというネーミングが刻まれている・・・。

* * *

平成5年9月19日夜、新潟・長野県北部のクロツバメシジミ調査を終え、小淵沢の拙宅でその成果を検討していると、突然めったに鳴らない電話のベルが高原の夜のじしまを引き裂いた。電話の主は他ならぬ埼玉昆虫談話会の盟友竹内さんであり、内容は市川先生急逝の知らせであった。

思わず落としそうになった受話器を必死に握りしめ、いくつかの生返事をした後ふと我に返ると、後には例え様のない虚しさだけがいつまでも残っていた。

* * *

あれは9年前だったか、埼玉昆虫談話会の編集による「埼玉蝶の世界」が発行された直後、ちょうど生態写真を本格的にやり始めたばかりの私にとって、各ページを彩る生き生きとした新鮮な蝶達の姿に心を打たれ、是非とも談話会の諸兄に生態写真を御教授頂こうと思い、恥をも顧みず金曜セミナーに突然伺った事が先生との初めての出会いだった。初対面の手土産に笑って頂こうと持参した稚拙な生態写真を、一枚々々丁寧に見てくださった先生の眼鏡越しの優しい眼が、今でも鮮明に思い出される。

最近は金セミをズル休みばかりしているので良くわからないが、当時の生え抜きの会員の方は一見まじめで堅物そうに見えても諸兄共適度にユーモアがあり、一人一話を聞いているだけでも失礼ながら大変に面白かった。違う種類の虫を追いかけている人達が全て平等に会話する機会があるというものは昆虫同好会広したいえどもそうあるものではないだろう。そしてなにより珍品志向が殆ど無く、採集頭数を自慢する人間はむしろ排斥される雰囲気がある事が素晴らしい。そうした談話会の特徴のひとつひとつが市川先生の人柄を素直に反映しているかのようだ。

ところがある時、普段の市川先生とは違った厳しい一面を垣間見る出来事があった。それは数年前に関西から関東へやって来た一人の虫屋の話題だった。その男は頭脳明晰?を誇るが故、クロツバメシジミ未開拓地の関東で先人の功を差し置いてたいそう立派な報文を発表したのだった。先生はその発表のいきさつを聞くや否や烈火のごとく怒りだされた。今にして思えばいたずらに功名心に走るあまり人の和というものを忘れ、謙虚な者の心を平気で踏み躡る行為に、常に礼節を重んじる先生は警鐘を与えずにはいられなかったのであろう。まるで自分の事のように興奮して話される先生の姿に、私は一瞬戸惑いながらも深く感動した事が今でも昨日の事のように思いだされ、心の一頁に鮮明に刻み込まれたのだった。

* * *

長野県にある〇村は未だ公式にクロツバメシジミの産地が見付かっていない未確認産地の一つである。

私は過去に数回この地を探索したが、食草は僅かにあるものの崖の質が悪く（クロツバメシジミの発見される崖の多くは色が黒く、赤い崖や白い崖には殆ど見付からない。ここの崖は白く粒子が細かい。）長年の感でここで採集する事は不可能だと思っていた。

市川先生の計報を聞いた翌日、この日は予定を午前中で切り上げ帰京した後に仕事を片付けてお通夜に伺おうと思いつ小淵沢を出発したのだが、思うように成果が上がりず半ば諦めながら最後の目的地〇村へ向かった。天候はこの年にしては異例な程の快晴で、成虫が発生していればまず確認出来る筈である。しかし、先程も言ったようにこの崖はクロツバメ向きではない、一応目を通しただけで帰ればお通夜にも間に合う筈だ。ともあれ、行くだけは行って見ようとハンドルをきった。

車を道脇に置き20分程歩くと白い崖の下に出る。相変わらず何もない崖下のナデシコやノギクにもセセリすら飛んで来ない。いつものことだと諦めて踵を返す。10m程歩き名残りを惜しむように後を振り返っ

て見た。何も見えない。やっぱり駄目か……今度こそは本当に諦めよう……いや待てよ、最後に一度あのノギクの所まで行って見よう。もうこれで終りと思うと意外にあっさり切り替えが出来た。そして、そこに戻る刹那、黒い影がスーと走り白い岩に止まる。

ヤマトシジミの雌かも知れない……と思いつつもネットが風を切る。

大部後翅を破損してはいたが紛れもないクロツバメシジミの雄だった。確かにここにいた。諦めなくて良かった! この時ばかりは自分の執念深い性格に感謝した。ふと時計を見るともう正午をまわっている。お通夜に間に合うように帰るにはもう遅いくらいだ。しかし、今まで気がつかなかったが道の下にも大きな崖が見える。恐らくあそこに発生地があるに違いない。その時、幼児のように逡巡している私の頭に、あの懐かしい、本当に懐かしい声が優しく響いてきた。

「余計な事を気にせず、自分の思った事をやり抜きなさい。私ならそうしますよ。」

もしかしたら谷間を抜ける風の音だったのかも知れない。でも私にはこうしか聞こえなかった。先生有り難うございます。思い残すこと無く調査を続けます。

結局、その後完全品の雌を一頭追加する事が出来、大成果の内に帰途についた。調査の成果というの採集頭数ではなく記録が出た事実である、ワンペアといえども大成果なのである。そして、お通夜には間に合わなかつたが、翌日の告別式には出席させて頂く事が出来た。遺影の前で手を合わせると、またあの優しい声が私の成果を祝ってくださったような気がした。

* * *

告別式の帰り道、ふと路傍に目をやると、道端に咲いているノギクにヤマトシジミの雌が吸蜜に来ていた。そう言えばあの崖で初めて見たクロツバメもこんな感じだったな……、しかし、何度も考へてもあのような崖の質で何故クロツバメが採れたのかよく分からぬ。今迄の私の経験を全て覆す事ばかりである。

トボトボ歩きながら見上げると、どんよりと曇った空に一条の光が差していた。そして、ふと何かが解決されたような感じを覚えた。

「いや、待てよ……これは先生からの贈物なんだ。きっとそうに違いない。」 何事も自分に都合の良いようにしか考えない独り善がりの私は、意味も無くウンウンと頷きながら駅への道を急いだ。

(ひだ ひかる 〒135 江東区清澄 3-5-11)

すばらしい蛾の世界をありがとう

松井 英子

1981年3月29日、浦和高校で談話会が開かれ、市川和夫氏はじめ、多くの会員の方々に「ヒメアカタテハの非休眠越冬」に関する私たちのこれまでの研究経過を熱心にきいていただいた。今までの定説を覆す研究をはじめて公開するということで印象深かったが、ちょうど10日前程、私が自然教育園でみつけたヒメアカタテハの非常に新鮮な個体のことで、同園の研究者に鼻であしらわれた直後であったため、なおさら私にとっては忘れられぬ談話会であった。

その後、蛾の世界のすばらしさを市川氏に教えていただいてからは、私のフィールドもひろがり、とりわけ、農業害虫として研究が進んでいる蛾の生態は、先のヒメアカタテハの生態研究の発展にとても参考になつた。ヒメアカタテハの長距離移動を考える時には必ず、コナガやアワヨトウやキンウワバ類の生態がダブつてみえてくる。このチョウは乾性草原に棲み、休眠機構を持っていない種なので、暑いにつけ寒いにつけ、私は世界地図を頭に描き、世界をまたにかけるヒメアカタテハに思いをめぐらせながら、いつの日か大發生地に行つてみたいと思っている。

市川氏はまた、個々の人格を大事にされた方であった。私は夫と共に虫やさんの集まりによく出るが、その時「松井さん」と呼ばれるのは夫の方で、私は「松井さんの奥さん」と呼ばれる。しかし、市川氏は私をフルネームで呼んで下さった。やはり普通名詞ではなく固有名詞で呼んではほしい。研究面でも、私がテーマをつけ、フィールドワークも私がほとんどやったのに、私は単なるアシスタントのように思われることもある。

市川氏がもうおいでにならない今、また「松井さんの奥さん」とされかねないので、虫関係用のペンネームを考え中である。

市川和夫氏には、あらためて心からお札を申し上げるとともに、返すがえすも、先を急ぎすぎて逝ってしまわれたことが残念でならない。



市川和夫氏 蛾を探るの図 松井 英子（風蝶草 No. 6 の図に加筆）

（まつい ひでこ 〒277 柏市根戸 427-5, 北柏第2住宅 3-102）

故市川和夫先生を偲ぶ

北本市史編さん室 炭谷 八重子ほか

市川先生に初めてお会いしたのは、平成2年5月20日の「自然動植物調査会」の席上でした。その日から4年余りの短い期間でしたが、「自然観察会」「灯火採集」「北本の動植物展」等々とご指導をいただきてまいりました。今年も、もう灯火採集の季節です。採集をされている時の先生は、童心にかえられた時のように本当にうれしそうなお顔でした。私たちは、顔や手、首など鱗粉まみれになりながらも先生のお話に夢中になりました。月夜の精「オナガミズアオ」の舞姿の美しさ、飛来直後の体の温かさを教えてくださったのも先生でした。



灯火採集 北本市高尾 1993年8月9日

平成4年11月、先生との最後の「自然観察会」は主にクモを見て歩いたのですが………遊歩道を歩きながら奥様やお嬢様のこと、南フランスなど「海外」に行かれた時のお話などを聞かせていただきました。

「先生この紫の実食べられるそうですよ」とお教えすると、奥様の「おみやげ」にと1粒リュックに入れておられた先生。

昨年のちょうど今頃（平成5年7月17日～27日）「第2回北本の動植物展」では会場の文化センターの方に何度も御指導やら見に来ていただきました。一度は「小川町の調査の帰りです」と寄って下さり、「ヒゲがのびているので」と楽屋裏に入られヒゲを剃って帰られるような気さくな一面も見せてくださいました。展示期間中は、その年の「調査」の時に市川先生が撮られたビデオも会場で流していました。私たちも、毎日見ては楽しんでいた事が想い出されます。

八月始め、戸田市立博物館で化石展を見せていただいた後「ここが僕の部屋」と言って案内して下さった先生の仕事場。いろいろご説明していただいたあと玄関まで見送っていただきました。

それから数日後、小川町へ調査に行かれる途中、編さん室に寄って下さり「この軽自動車は仕事用、乗用車はデータ用」と車を見せに来て下さった先生。

事故に遭遇される1週間前の土曜日（11日）には、北本の編集会議に元気なお姿を見せられました。「北本の動植物誌」の原稿の事や、会議後、小川町へ夜間採集に行かれる事等話されていました。

そして、それが私たちの知る市川先生最後のお姿でした。私たちに昆虫を採集する真の意味を教えてください、観察会や灯火採集を通じ自然に感動する心を教えてくださいました。今、北本市史編さん室では、先生の遺作とも言える「北本の動植物誌」を編さん中です。どうぞ天国から私たちを温かく見守ってください。

合掌
(〒364 北本市北本宿 158-1)

市川和夫先生の思い出

本多 健一郎

市川先生死去の知らせを巣瀬さんから伺ったのは、昨年の9月19日でした。あまりに突然のことで、10カ月以上たった今でもまだ信じられない気持ちです。

私が市川先生に初めてお会いしたのは、高校一年（1972年）の夏のクラブ合宿で尾瀬ヶ原へ旅行したときでした。当時先生は通信制高校に勤めておられましたが、私たちのクラブの顧問をしておられた小杉先生に誘われて、合宿に参加されたと記憶しています。

この時、昆虫採集禁止の尾瀬で、「これがエゾスジグロシロチョウだよ」と言いながら、飛んでいる白い蝶を手でつかまえて見せて下さったのが大変印象的で、今でも記憶に焼き付いています。この旅行でご一緒したのが縁で、その後も市川先生のもとに入りしがら蝶や蛾の生態や分布について色々と教えていただきました。また、当時、埼玉県動物誌編纂のための基礎調査が実施されており、先生が鱗翅目を担当されていたことから、秩父や奥武蔵などの採集調査に何度もご一緒したことでも楽しい思い出の一つです。

高校三年になっても相変わらず蝶の観察や採集などをしている私に対し、周囲のほとんどの人間が「受験勉強は大丈夫か？」と忠告する中で、「この蝶の分布は面白いね」などといつも楽しい話題に終始した先生との会話は、受験ストレスに押しつぶされそうだった当時の私にとって、大きな心のやすらぎでした。

幸いにも、私は大学でも好きな昆虫学を専攻し、ついには虫の研究で生活する羽目となりました。研究の対象は農作物を加害する小さな蛾やアブラムシですが、今でも先生と採集調査に出かけた高校時代と同じく、虫の生活の不思議さに対する感動と好奇心を忘れぬよう努めている毎日です。

最後に先生にお目にかかったのは、1991年の秋、私が英国での在外研究に出発する前にご挨拶に伺った時でした。その夜、フランスのファーブル記念館を訪れたときの事などを、ビデオを見ながら楽しそうに話しておられたのが昨日のことのように思い出されます。帰国後、忙しさにかまけてご無沙汰しているうちに、英國の昆虫についてのみやげ話をできぬままお別れすることになってしまったことが、何よりも残念でなりません。

先生のご冥福を心からお祈りしつつ、ペンを置きたいと思います。

1994年7月、盛岡にて。

（ほんだ けんいちろう ☎020-01 盛岡市下厨川赤平4厨川住宅 3-504）

生涯一蛾屋・市川さんのこと

松井 安俊

私がはじめて蛾の採集をしたのは、高校生物部の先輩に高尾山に連れて行かれ、照明を終夜点灯したケーブルの駅でのことだった。モモンガが天井で騒ぐのを聞きながら、あちこちの壁に止まっている蛾を『毒瓶で直接採る』という方法をこのときに覚えた。いまから、35年以上も前の昔のことだ。以後の採集会などでも時々アセチレンランプを使っては蛾を探っていたが、卒業後は虫から一時はなれだし、ほとんど蛾を触っていないかった。

埼玉蛾類談話会の宿泊採集会が秩父川又の東大演習林で行われた1981年夏に、灯火に群がるたくさんの蛾と『再会』した。このときからが私の蛾との本格的なつき合いで、その道筋をつけてくださったのが市川和夫さんであった。

【大きくておなかが太くなくちゃ、蛾じゃないですよね。だから、スズメガやシャチホコガはいいですねえ】

【この蛾には、あなたならどんな名前を付けますか？ ほら、丸い紋があって、地色がまっ白でしょう、それでこれはマルモンシロガ。“ゼロ戦”ともいいますがね。蛾の名前って素直で簡単でしょ。】

こんな話をされながら、採集品を手早く仕分け、手によく馴染んだピンセットを使ってクルリと蛾の翅を反転させ、三角紙に収める手つきに、いたく刺激を受けた。この頃、講談社から画期的な『日本産蛾類大図鑑』が、4000余種を掲載して発行された。市川さんの真似をして、あの分厚い図鑑をばらし、科やグループ

別の7分冊にして、2年続けた秩父の合宿での採集品を同定、整理した。“小さくておなかの細い蛾”をやつてみよう、メイガ、ハマキガやシャクガについてまとめてみると、先年に市川さんがまとめられた『埼玉の蛾類(1978、埼玉県動物誌・所収)』の1400種には含まれないものがかなり記録できた。このことを市川さんが評価して下さり、その後の私の蛾採集の励みになった。

以来、幾度も夜間採集にご一緒させていただいた。市川さんのタイムスケジュールは、好みの蛾にあわせたものだった。日没後、比較的早く飛来するスズメガやヤガを探集してしまうと、甘党の彼は皆より早く切り上げて寝てしまう。未明に起きると、遅出で、幕に止まるとはんどん飛びばないシャチホコガを、鳥たちを出し抜いて採集する。ついつい深夜まで飲んで騒いで、ろくな採集にならないことがある私などとは違い、いつも感服させられた。市川さんはその後も着々と埼玉の蛾相を解明したが、私が手掛けた茨城の蛾は、まだ1200種で、そのおくれは15年以上あり、追い付く目途は立たない。

市川さんから蛾とのつき合いを教わったことは、他にも大きな影響を及ぼした。もっぱらヒメアカタエハの生態を研究していた私と共同研究者・松井英子にとって、非休眠・長距離移動という性質をもつ蛾類の存在は、鱗翅目のほんの一部にすぎない蝶からの経験や知識の限界を越えて、問題により深くとりくむ目を開かせてくれたのである。

定年後、それ以前にも増して精力的に夜間採集をなさっていた市川さんから『いちばん怖いのは野犬などではなく、人間ですね』と聞いて、いささか複雑な思いをしたことがある。夜間の灯火採集の帰途、人間の業である自動車事故で市川さんは逝ったが、『生涯一蛾屋』を、舞台で大往生した役者のように、みごとに貫いたのだと思う。

(まつい やすとし 〒277 千葉県柏市根戸 427-5 北柏第2住宅 3-102)

市川先生ありがとう

星野 正博

先生に初めてお会いしたのは埼玉県動物誌の調査を通じてであった。数年後、初めて手にした「寄せ蛾記」は市川先生が自ら和文タイプを打ったものであった。小さなポイントの円い活字が誌面に心地よさを与えていたのは先生の人柄がにじみ出していたからでしょう。碓井先生のお話によるとちょうど手書きからタイプに変えた頃、会を発展を考えて入会の案内を送っておられたようである。入会以来、市川先生の集まりという雰囲気の、アットホームな会が大きく育ちながら続けてきたのは先生有ってのことだと思うと、突然の訃報に本当に驚きと言葉もなかった。

幸い、大きく育った談話会員が今後を引き継いで益々発展する土台ができています。

先生ありがとう、どうか安心して会の動きを見守って下さい。

(ほしの まさひろ 〒338 与野市下落合 5-14-31)

市川和夫さんの思い出

利根川 雅実

市川さんとの最初の出会いは、1987年夏の宿泊談話会だった。群馬県武尊山の近くの民宿に午後4時頃到着すると、一人でせっせと、しかも黙々と作業をしている人がいた。私は前月に入会したばかりであったため、どうしたらいいものかと思ったが、そのまま部屋へ入ってしまった。

夕食時にその人が市川さんであることがわかった。笑顔で「今晚飛んでくるカブトムシやクワガタムシは子供達に採らせてあげて下さい。」とおっしゃった言葉が今でも強く印象に残っている。そして、毎夏の宿泊談話会ではいつも「子供優先・・・」の言葉があり、クワガタなど子供達が争って採るのを目を細めてご覧になり、美しい蛾やめずらしい蛾がくると名前を教えておられた。市川さんの子供好きと子供たちに昆虫好きになって欲しいという想いが強く感じられた。

また、金曜セミナーの一人一話の折り、私は当時住んでいたマンション各階の廊下の電灯に集まる昆虫を息子と採集していることを話したところ、非常に興味を示され、蛾を採集したら見てあげましょうと言われた。その言葉に甘えて採集した蛾を見ていたが、その中に関東の平地では珍しい蛾があったということで、寄せ蛾記の原稿を作つて下さった。それも、採集しただけの私が著者となっており「勝手に書かせて頂きましたが、よろしいですか。」という丁寧な言葉をいただき、恐縮してしまった。

それ以来、採集した蛾を見ていただくようになった。蛾を三角紙のままお渡しすると、きれいに整った手書きのリストを作つて下さった。その後は自分でも同定して、お宅に伺い見ていただいたが、いやな顔一つされず、むしろ嬉しそうにそして楽しそうに見て下さった。多少同定の難しい蛾が正しく同定されていると「よくわかりましたネー」、間違いがあると「この種は難しいんですよ」と言って下さった。

このような市川さんの人柄が、会の今も続く自由な雰囲気と来る者は拒まずという寛容さにつながっているのだと感じている。

また昨年、亡くなられる数週間前にヨーロッパ旅行の報告に、お宅に伺った。私は子供を伴つてよく訪問するが、この時は久しぶりに大きくなった息子と伺つた。いつものように奥様が市川さんの隣に座られ、市川さんの入れたコーヒーを飲みながら、私の話を一緒に聞いて下さった。

「県民の森」で採集した蛾の標本も見ていただいたが、同定ミスをいつものようにやさしく指摘して下さった。「これは珍品ですよ。いいものを採りましたネ！」、「県民の森へも採集に行きたいのですが、調査会と重なつてしまつて・・・」

そして、「あと何年かしたら外国でのんびりと虫採りをするつもりなんですよ」とおっしゃった言葉がいまだに昨日のことのように耳に残っている。これが個人的にお会いした最後となってしまった。

市川さんが事故に遭われた時はちょうど「県民の森」での夜間採集調査会であった。翌日、日曜日の午後家に着いたとき、訃報を聞き大きなショックをうけた。

今は天国で虫達と楽しく過ごされていることでしょう。毒瓶やピンセットや三角紙の入つた箱を前にして、折りたたみ式の椅子に腰を掛け、蛾を採集されている姿が目に浮かぶようです。

(とねがわ まさみ 〒336 浦和市三室 3471-1)

ホタルガに寄せて

碓井 徹

市川先生の死を、私はいつになつたら自分で納得する形で気持ちの整理をつけることができるのだろうか。お通夜では、棺を覗いてお別れの言葉をつぶやくこともせず、告別式で牧林会長の読み上げる弔辞を、私は意識をそらして耳にいれずにいた。虫の話を精一杯するのが供養だと、お通夜も告別式も、私は周囲の方々と虫談義に花を咲かせ、努めて冷静に振る舞っていた。これまでの人生の少なからぬ時間の経過の中で繰り返し大きな影響を与え続けてくださつた方と、突然お会いすることが出来なくなってしまったことを、それが私にとって重大な現実であることを、私は未だに一生懸命に考えようとしている。

市川先生との出会いは、25年前に遡る。まさに“生物部三昧”の高校生活を送つてゐた私は、或る日、顧問の小杉昭光先生から、「隣の通信制高校に蛾に詳しい先生が転勤してきた」旨を告げられた。さつく昆虫班の他の部員と共に市川先生をお勧め先に訪ねたのが、先生との最初の出会いであった。

これがきっかけで、その冬に通信制高校でひらかれた埼玉蛾類談話会の集まりに呼んでいただき、その時に談話会に入会したように思う。大勢のオジサン達が繰り出す蛾の話を、私は目を丸くして唯々啞然として聞き入るばかりだったよう覚えている。

私が大学に入った時分は、ちょうど“埼玉県動物誌”刊行事業がスタートした頃だった。動物誌のための基礎データの集積と“寄せ蛾記”再出発とがビタリと波長が合い、帰省して先生のお宅にお邪魔したり、

お勤め先に押し掛けたりしたときなど、『埼玉県内のこれまでの蝶の記録をぜひまとめてください』と盛んに“寄せ蛾記”への投稿を薦めて下さった。また、『奥秩父の県境尾根付近は面白そうだね。私は無理だけど、碓井さんなら調べてこられるでしょう』と、高校時代に奥秩父の主脈縦走を繰り返していた私に、動物誌のお仕事をお手伝いできるようなチャンスを作って下さった。私は二つ返事で約束をし、その夏には1週間分の食料と5本繋ぎの長竿を担いで三峰山から雲取へ勇んで入山したものだった。

教育実習でもお世話になり、先生は私に、埼玉県に戻って高校の生物の教師になることを強く勧めて下さった。教員採用試験を受けるときにも、随分丁寧にアドバイスを下さった。この頃は、ちょうど“埼玉県動物誌”の編集が最後の詰めにはいっていた時分だったのだろうか。私が大学生だった頃の市川先生は、いつも動物誌のことばかり考えておられたように記憶している。

私が教員になると、すぐに高校の生物担当教員で構成している研究会への参加を勧めてくださり、何かテーマをもって研究活動もするようアドバイスを下さった。

『チョウはいろいろな人が得意にしています。専門にやる人が少ない分野ほどあちこちで活躍の場ができるてくるものだけれど、碓井さんは、チョウ以外で何かやってみたい分野がありませんか。』

学生時代にトンボを少しいじっていたこともあって、私は即座に『トンボをやります』と答えていた。こうして、私は先生のこのアドバイスで、今でもトンボを追いかけているような状況である。

その後、埼玉昆虫談話会にのめり込んでいった私の市川先生との想い出は、本誌巻頭の“～歩み”にポツポツと書き記したとおりである。

お通夜で柩の周り飛び回っていた1頭のホタルガから、市川先生からのメッセージを読み取ろうと、私は必至になって目で追い続けた。私には、先生がお別れを言いに来たのだとと思えなかっただし、ホタルガを先生の化身と見立ててお別れを言おうとも思わなかった。何か、先生の“命”をホタルガが引き継いでいるような、そんな気持ちで見続けていた。そして、その気持ちのままできてしまった。先生の死を直視しないまま、先生とはお会いできないけれど何処かにおられるような、少なくとも私の意識の中には、市川先生が以前のままで間違いなく存在している。私は、『心の中で生き続ける』という言葉を間違ひなく実感している。市川先生は、やはり私の意識の中で生き続けているのだ。

(うすい とおる 〒362 上尾市壱丁目454-3)